逆転生活！

たまごやき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
逆転生活！

【Ｎコード】
Ｎ７９８９Ｈ

【作者名】
たまごやき

【あらすじ】
好きと思えば思うほど、気持ちは空回る。どうかお願い、遠くに、誰かのもとに行ってしまわないで。

［1］第1章　逆転（前書き）

［1］第1章　逆転

――――冬も去り、春のほのぼのとした陽気が少しずつ顔を出し始めた3月。

赤と黄色のシンボルマークで、世界のあちらこちらに出店しているこの店は

日本では省略して呼ばれることが多く、西と東では略し方が異なる。

ここは関東だから、大体の人が

「マッ○でいいよな？」

“○ック”と呼ぶ。

「うん…マッ○でいいよ。」

たくさんの車が流れる道路の向こう。落ち着いたカラーで統一してあるカフェが良かったんだけど…

“あたすぃー、スタ○がいーなぁーっ”

なんて口が裂けても言えません。

正真正銘の女だし、まだ１０代だし、言っちゃいけないわけじゃない。

…でも

身長１７３センチのデカ女がそんなブッた声…出せるわけないんだっ！！

ギャップ萌え？

いやいや…ありえませんって。

どっかの可愛らしいモデルさんなら許されても、

あたしには許されないんです。

肩は固く角張って、母親曰く“トレーナーとか干すときに使う大きなハンガー”で…

洋服はもちろんジャンボサイズ専門店。浴衣なんて“おはしょりっ？何ソレ？”の領域に達してしまった。

ちなみに今履いてるローファーは男物…

…ほら、また聞こえる。

『ねえ見て、あそこの男の子…セーラー服着てるよーっ』

『あっほんとだぁー！顔良いのにもったいなくない？』

『確かに。いくら顔良くても…さすがに女装趣味はパスだよね…』

女装趣味じゃないから、あたしはただ中学の制服着てるだけだから…

なんでそんなこと言われなきゃいけないの？

［2］

あたしがこんなんになったのは全部お父さんのせいだ。
お母さんの遺伝子を少しでも引き継いできたら…まだ女の子らしくなってたかもしれないのに

流れる人の波の中、ふと足を止める。
俯いたら、歩道に綺麗に敷き詰められた暖色のレンガに
あたしの２６センチとビッグな足がピッタリとくっついていた。

突然立ち止まったあたしを心配するように前を歩いていた男の子が振り返って寄ってくる
「…慶？どうした？」
ふと視界が暗くなって、あたしの大きな足の前に一回り小さな足が入ってきた

ふと口が動きそうになる…

ねえ、どうして？

くりくりの目で、バッサバサの睫毛で、

お人形さんみたいな顔で、、、

どうしてそんなにかわいいの？

でもその思いは寸前のところで食い止める。

知ってるから。智も自分のその顔がコンプレックスだって。

あたしが男みたいな自分を嫌がってるのと同じで、智も女みたいな容姿を嫌いだって…

でも智は最近変わってきた…周りの目をあまり気にしなくなってきてる。

「おい、慶…どうした？」

でも…あたしにはやっぱり耐えられない

「智…やっぱり家帰ろう？」

あたしがこう言うと、

「いつまでそうやって逃げるつもり？」

人形のような顔は歪んで、私を残して人込みの中に消えていった。

———もう智はいつまでも自分を受け入れられないあたしとは違うんだ。

ひとり、取り残されたあたしは人込みを避けるように家に帰った―

―

[3]

自分の家の門の扉を開ける前に、ふと隣りの家に目をやった…

2階建ての白い壁の洋風な我が家とは対照的にがっちりとした塀に“弓月(ゆづき)”の表札。平家で抹茶色の壁にいかにも重そうな瓦を乗せた、智の家。

「智、まだ帰ってないんだ…」

オレンジ色の明かりを燦々と外に漏らす我が家とは違い、智の家は真っ黒だった。

いつも家にいるうちの母親と違って、智のママは仕事一筋でなかなか家に帰ってこない。

全く違うように見えて意外にも共通点はたくさんある。

自分達がタメとか、親が同級生とか、3人家族とか、無駄に家が広いこととか、犬飼ってるとか、、、

親の仲がいいから、お互いに物心付く前から知ってた。

だから何でも話す家族みたいなもの。

…そう思ってたんだけどな

智は中学に入ってから変わった。

智のママが帰ってこれないときはいつもうちでご飯食べてたのに来なくなったり…

ってこんなこと考えてたって意味ないし！！

開けかけていた門を思いっきりあけて、これまた無駄に長いアプローチをズカズカと進んだ

「ただいま」

おかえり、

この家族の温もりを智は覚えてるだろうか———

「慶、また智くん怒らせたんだって？」

夕食の席、お母さんが聞いてきた。

「…なんで知ってんの？」

「万理ちゃんがね、メールで教えてくれたの。智くん今日は慶と外で晩御飯食べるって言ってたのに夕方にドアの開閉がされたってセ

キュリティーのメールが来たからって。」
家が隣で親の仲が良いとなんでもかんでも筒抜けだから困る
「ねぇ慶、どうして智くんのこと怒らせちゃったの？」
「…セーラー服で外歩くの嫌だったんだもん。」
「中学の制服なんだから仕方ないでしょう。文句言わないの。」
ふさふさの睫毛に囲まれた大きな瞳が、説教してくる。
それが…その顔が…無駄にむかついた。
…あたしにないもの、あたしが欲しかったもの、その全てが詰め合わせてある

「…文句だって言いたくなるしっ！」
あたしは怒りを込めて思いっきり箸でプチトマトをぶっ刺した

［4］

でもプチトマトは箸の攻撃を上手くかわして
皿から机、机から床にコロコロと転がっていった。

「慶！食べ物で遊ばないのっ！」
んなこと言われなくても分かってます！
てか遊んでるわけじゃないし！
だいいち、トマトちゃんがこんなことになったのはお母さんのせい
なんだからねっ

「早く腐る前に拾ってきなさーい」
「もー分かってるってば！」

箸をテーブルにおいて、ソファーの方に見える赤い物体を拾いに行く。

トマトを拾おうと手を伸ばすと、あたしより先に、ある人がそれを拾った。

「あ…お父さん。おかえり。」

お父さんはスーツの胸元でトマトを磨いて、そのまま口に入れておいしそうに口を動かす。

…3秒ルールってやつですか？

トマトが口の中から無くなったころ、口を開く

「慶、不機嫌だね。またママと喧嘩したの？」

…けんか？喧嘩じゃないと思う、

「“ただの言い争い”だよ。だってお母さん口うるさいんだもん。」

そういうと見計らったようにキッチンから背の低いお母さんが顔をだして怒鳴る

「パパ！“ただいま”はっ？！」

「…確かに。」

妙に納得したように、お父さんは笑った。

「それで？言い争いの原因は？」

スーツからスウェットに着替えて、コンタクトからメガネに変えたお父さんはすっかり“おうちモード”

ヘラヘラと人の良さそうな笑みと高身長だけでお父さんが、学生の頃にモデルしてたっていうんだから…世の中は分からない。

…コレのどこがいいんだか。

［5］

「慶がね、制服で出歩くのが嫌って言うのよーっ」

お父さんの質問に、お母さんは口を尖らせて答えた。

もう３０代後半だってのに…この人は無意識に無邪気な年齢を感じさせない顔をする。

…お父さんはきっとお母さんのそういうところに惚れて結婚したんだろうな。

「鈴（リン）、人には好き嫌いがあって当然だと―――」

２人はたまに家族であるあたしさえも入る隙がないような雰囲気を作る。

お父さんが、お母さんのことを“鈴”と読んだときがそう。

そしてその都度、はんぱない疎外感を感じるんだ。

あたしがこんなにもお母さんに似てないのは

本当の親子じゃないからなんじゃないか
だからあんなに口うるさく言ってくるんじゃないか
とか…くだらないことまで考えてしまう。

「――――い。けい？大丈夫？」
「えっ！何っ？」
「熱でもあるの？」
そう言ったお母さんは心配そうな顔つきで、小さな手をあたしのおでこに当てた。

こうやって心配したりしてくれる仕草が
マイナスな思いをプラスに変えて
自分はこの人の子供なんだとつなぎとめてくれてる
「…少し熱があるわね。もう寝ちゃいなさい。」

「…うん。」

ダイニングからリビングのテーブルの上においておいた携帯を取って廊下にでる。

一定の間隔で青いライトが点滅して、脇のボタンを押せば小さなディスプレイに“受信メール1”と表示される。

開けば“弓月　智”の文字。

「…明日。明日でいいや。」

結局未読のまま携帯はすっぽりとポケットに収まった。

そして歯を磨き、ようやく自分の部屋に入ってベッドに腰を掛ける

部屋を見渡して、ふと笑ってしまった

「みんなが見たら…どう思うんだろっ」

その空間は可愛らしい小物に溢れて、ビタミンカラーで埋め尽くされたそこは、いかにも“女の子”のお部屋。

その部屋の住人は、部屋に反して中学では

“クール”だの“ボーイッシュ”だの…言われるあたし。

まあ…本当は人見知りが激しくて、あんま喋らないだけだし…セーラーじゃコーディネートの仕様がないだけなんだけどね。

その時

「慶、入るよ。」

コンコンとノックされたドアから

１９０センチの巨人が入ってきた

[6]

「…どうしたの？」

「ママの手は当てにならないから。」

そういって巨人はあたしの質問に手に持っている体温計を軽く振りながら笑って答えた。

差し出された体温計を拒むことなく脇にはさむ。

火照った体に、冷たい体温計がひんやりとして気持ちいい。

「ねぇお父さん、なんであたし女として生まれてきちゃったんだろう？」

ほんの冗談のつもりだった…

なのに

「慶…ごめんね。パパのせいだね…」

ちょっ！真に受けないでよっ！

「違う！違うのお父さん！そんな本気じゃなくてっ…ただ…男だったら……」

照明以外何もない。ただの白い天井を見上げた。

冗談のつもりだった、それを真に受けた父親に焦った。

でも…ぽろっと言った自分の冗談を一番真に受けたのは自分だったのかもしれない。

「…ただ…男だったら……どんなによかっただろうって…」

いままで、思っても口に出さなかった。

口に出したらそこで歯止めが利かなくなるって分ってたから。

一度思いを口に出してしまったら、溜め込んでいた言葉は決壊したダムの水みたいだ

下流は一気に氾濫。街には濁流にのまれる。

「どうしてっ！！どうしてあたしはこんなナリなのっ？！」

熱があるから？普段はこんな自制が利かないことなんてないのに

抑えきれない感情はあふれるばかりで…

「なんであたしはっ！！」

仕舞いにはベッドから立ち上がって、手当たり次第に部屋の人形やら小物やらを投げ散らかしていた———

「慶！おちつけっ！」

いつも穏やかな父親の珍しく焦った声が部屋に響いた

そんな声も今は、あたしをさらに煽るだけ

「なにも知らないくせにっ！」

棚の上に乗せていた物をただ床に撒き散らしていただけの腕が、動きを変えた

「あたしの辛さなんて何にもわかんないくせにっ！！」

手にとったフォトスタンドが勢いよく父親の腕に当たる。

あたしはそれに気づかずに、近づいてくる彼に次から次へと物を投げ続けた。

父親の姿が目の前に来たときふと頭に重みを感じた

「…ごめんね、慶。ごめん。」

【7】

「…もう、やだよ。」

さっきまでの発狂ぶりは何だったのか、急に大人しくなった心は涙に濡れる。

“男みたいなナリで涙なんて流しちゃいけない”

そう思って、部活の引退の時も女バスの中で一人、泣きたいのを堪えて平然な顔をしてた

「泣きたいなら泣けばいい。怒りたいなら怒ればいい。それは男も女も関係ないんだよ。」

大学教授の言うことだからか…妙に説得力がある。

あたしは静かにうなずくと、声を殺して泣いた。

「……んっ…」

あまりの明るさに瞼をあけた――――

いつの間に寝ていたのか、いつの間にベッドに入っていたのか、

知ってるのはきっとあの巨人だけだ。

まだ少し重い体を起こして脇のカーテンを開けると、眩しいほどの

陽の光が入ってきた

「…やっと起きた。」

聞き覚えのある声に恐怖をおぼえながら、ソロソロと首を窓とは逆の方向に動かす

窓とは逆サイドに、昨日喧嘩したばかりの

「と、智…」

幼馴染みがいた。

あんな分かれ方をして鬼畜な彼のことだ…今日はその報復にきたに違いない

「な…なにしに来たの？」

あたしのこのひとことで彼の顔は鬼のように歪んだ

…あ、あれぇ？

「な、なんでそんな顔すんの？」

「うるせぇっ！このクソがっ！メール見てねえのかよっ！」

智は顔に似合わない声と言葉遣いで叫ぶ

こういうときに彼も男だったんだと思い出す。

…ってクソって何様のつもり？！

「あんたからのメールなんて読む気しないし！てか智にクソとか言われる筋合いないんだけどっ！」

「うっせぇ！もうてめえはクソ以下だ！」

「はぁっ？！何様のつもりだって」

「俺様！智様！　大体てめぇが『智ッ！！』

一段と低いハスキーボイスが智を遮った

「親父、邪魔すんなよ。」

さっきまでは智の声を低いと思ったけど、この人の声を聞くと全然高いように感じる

「お前はホントにガキだな。男はそんな怒鳴らねぇんだよ。」
バカ息子がごめんね、慶ちゃん。
智パパはそう言ってあたしのところにやってきた

「そんな、こっちこそごめんなさい…」
あたしも怒鳴ってたから…智を一団と悪く言えないもんね

「…あれ？しばらく見ないうちにまた綺麗になった？」
油断してたら顔を両手で包み込まれた

ちょっ！何するんですかっ？！
そう言おうと思ったのに先を越されてしまった

「親父っ！慶を口説こうとするんじゃねぇっ！！」

今にも飛び掛りそうな智に智パパは苦笑する
「お前…３５のオッサンに本気になってキレんなよ。それに自分のガキと同じ１５のお嬢ちゃんに手を出すほどバカじゃねえし、暇でもない。仮にも大学に勤めてるんだぞ？」

そう。智パパはうちのお父さんと同じ慶智大学の准教授…。
智パパは若いときは結構モテたらしく…てか今も結構モテるらしいけど…まあ、武勇伝は数知れず。

「ってか“親父”じゃなくて“お父様”と呼べ、馬鹿息子。」

「馬鹿息子だ？俺にはあんたが付けたダセェ名前があんだよ。名前で呼べ、糞ジジイ。」

…ここまできたらもう…味噌と糞。

「てめぇどこでそんな言葉覚えてきたっ！昔は『パパーパパー』って可愛かったのに…いつからそんなにかわいくなくなったんだ！」

智パパは涙を薄く滲ませる、そんな姿を見ると
智の口の悪さはあなたがルーツです。なんてとてもじゃないが言えない

「俺は男だ。かわいいなんていわれたくねえよ。」

智の言いたいこともごもっとも…

目の前で繰り広げられる親子喧嘩をどうしようかと頭を悩ませると

意外にも早く、ことは解決した

［8］

――――ぐぅ～～～～っ

腹ガヘッタ…。

恥ずかしいことに、あたしのお腹がそう鳴いたんだ…

二人は一時休戦、あたしの豪快な腹の音に笑いを堪えるのに必死らしい

2人して俯いて肩を揺らす

ついに堪えられなくなった智パパがガハハと豪快な笑い声を響かせる

「慶ちゃん、庭行こ！庭！」

そう庭を指さされて…白い窓枠の間から庭を見下ろすと

庭で頑張ってバーベキューの用意をしている父親と母親、智のママの姿があった

そしてようやく思い出す

「そっか…今日バーベキューの日か。」

きっとメールもこのこと書いてくれてたんだろうな…

「智、ごめんね。」

「大事な休日を返上してやってるっつーのに…忘れてたとか…ふざけんなよ。」

そう言った彼の言葉にはいつものキツさとかがなくて…弱弱しい感じに少し戸惑った――――

それじゃあ庭で待ってるから、着替えておいで

そう言われてはや5分。

暴れまわって荒れ果てさせた部屋は、あたしが寝てる間にお父さんの手で直されたらしく小物の配置は変わってるもののある程度綺麗になっていた…のに、

たった5分で部屋に隣接されたウォークインクローゼットは“泥棒が入った後?!”と見間違えそうなほどに荒れ、

部屋は、フローリングを隠すようにあちこちに散らばった洋服たちで荒れた。

そして、ベッドの上のデニムとショーパン。

堂々と生足を披露するべきか…

自重して隠すべきか…

といったところである。

あたしはまだ若い！生足おっけーでしょ！

心の中で絶叫してショーパンに手を伸ばしたところで止まる…

お父さん、お母さん、智パパ、智ママ、智、

生足披露してどうする？

てかそもそもこの全員家族みたいなメンバーでなんで迷ってんのあたし！

生足を選択しそうになっていた手は、デニムに伸びた———

下が決まったら話は早い

あとは上に適当なのを何枚か羽織って終了。

あたしは着替え終えると部屋を出て、玄関ホールへと繋がる階段を

駆け下りた

洋風な家によく合う洗面所の金色の蛇口を勢いよくひねると、冷たい水が重力に従って落ちて弾けた

跳ねた雫は何事もなかったかのように、配水管へと流れていく

季節はまだまだ寒い2月の終わり、

冷たい水で顔を洗うほどの勇気もないからあたしは蛇口から出る水から湯気がでるのをじっと待つ。

ふと顔を上げると、洗面台の大きな鏡に自分の姿がうつっていた

ほんのりと紅い唇。今朝見た彼の唇も同じように紅かった。

———忘れもしない、あれは今から3年前。小6の終わりのことだ。

【9】

『やだっ…やだよっ…』

泣きじゃくるあたしの頭に父親の手が伸びる

『慶…わがまま言っちゃダメだよ…』

涙の理由はただひとつ、智の引越しだ。

関東全域にキャンパスを置く慶智大学。

理由は分からないけど、そこで働いている智パパが今よりずっとずっと遠くのキャンパスに行くことになってしまった…

同じ病院で生まれて、同じ幼稚園に通って、小学校もクリスマスも
お正月も…
家が隣同士で、毎日、顔見て怒って泣いて笑って…
…いて当たり前、だった。

それなのに
いつ帰ってこられるか分かんない。

そんなこと言われたら

『中学はムリだけど…高校は寮があるだろ?…3年経って高校生に
なったら絶対帰ってくるから…』
智がそう言ってくれたとしても
『やだっ…やだよっ』

ふと我に返ると、いつの間にか水からお湯に変わった蛇口のそれが
鏡を曇らせ始めていた

手を伸ばして捕まえようとしても、目に見えないほど小さな指の隙間からするするこぼれていく

あたしは水は人の心に良く似てると思う。

温かかったり、冷たかったり、

澄んでいたり、濁ってたり、

…掴めてる、と思ってしばらく放っておいたら、知らないうちに見えない指の隙間から全て逃げてたり

ピチピチ跳ねるイタズラ好きだったり

本当の形が無くて、自分に用意された入れ物に抵抗もなく収まろうとする。

そのくせそこに収まりきらないと知ると物凄い力で反発する。

とても悲しい寂しいもの。

顔を水で濡らしてから、たくさんの洗顔フォームの泡を両手に乗せて、、、ばしゃばしゃと洗い流す。

泣いて腫れぼったくなった瞼が醜い。

そんなあたしを遠くから呼ぶ声

「けーいーちゃーーんっ！早くおいでーっ！」

［10］

リビングの方から聞こえてきた大声は、智ママだ。

庭からリビングの大きな窓を開けて上半身だけ家の中につっこんで叫んでいる姿が安易に想像できる…

さっぱりさばさば、見た目も性格もクールなキャリアウーマンママ。

うちの和み系のおっとりお母さんとは真逆のタイプだ。

「すぐ行きまーすっ！」

短気な彼女の機嫌を損ねないように、急いで返事をする

そして、軽く髪を梳かして廊下を駆け抜けた

目の前には2足の靴。

クロネ○ヤマトとか宅急便屋さんが来たときに家族みんなが咄嗟に履く大きなサンダルと、『もうすぐ高校生だし…ね？』靴屋で母親にそう促されて、初めて手にした高いヒールのパンプスだ。

高い身長が嫌で、ヒールの高い靴なんて買いたくなかった。

それでも“高校生”という響きに、母親の気遣いに、、、初めてこの靴を履く決意をしたんだ…

こうやってソレがここにおいてあるのも、お母さんも気遣いなんだろう。いつまでも女の子になりきれない自分の娘への。

あたしの足は躊躇いつつも、黒いパンプスに当たる

でも

履いたらもっと背が高くなる。“女装”そう言われる。

そんな思いに、足はひっこんだ

「…他の取りに行かなきゃ」

あたしはフラフラとシューズクローゼットに向かう。

そんなあたしを嘲笑うかのように、頭の中に昨日の智の言葉が…

“そうやってまた逃げるわけ？”

あたしはこの世に女として生まれてきた…それは紛れも無い事実。

たとえ男みたいといわれても…あたしは女なんだ。

「智…あたし、もう逃げないよ。」

カツン―カツン―

アプローチの敷き詰められたタイルに細いかかとが当たる音が心地いい。

スニーカーじゃ得られない、女の子だけの音。

…けど、庭は歩きづらかった。

細いヒールが土に食い込んでうらうらする。それにオープントゥが祟って爪先がくすぐったい。

それでも懸命に芝生を進んでいくと、ようやく賑やかな所に着いた

「あら慶、遅かったじゃない。」

大きな肉を串にさしながらお母さんがふと振り向いた。

ぱっと見た感じ、お母さんと智ママは調理。お父さんと智パパと智は飲み物片手にテラスの木製のイスに腰掛けて世間話といったところか…

この流れからいくと…あたしは調理にまわった方がいい。

洋服の袖を捲くりながら二人に近づくと

「そんな格好で寄られても迷惑迷惑っ」

智ママにアハハと豪快に笑われながら拒否られた

「白い服にタレでも飛んだら“落ちない！”って鈴ちゃんに怒られちゃうわよーっ！それにヒールじゃ危ないじゃない、ねえ鈴ちゃんもそう思うよね？」

「そうねー危ないわ。」

危ないわ。ってあんたがこのパンプス出したんだろっ！っていうツッコミは別にして

確かに2人ともバーベキューにはとても似つかわしくないエプロンを着けていた。

母親たちに拒否られ、テラスの3人の空気は“男だけの話”って感じがいかにも漂って近寄れず…

「…何すればいいんだし」

にぎわう庭でひとりぼっち…

その時、

「クゥーーーン…」

自分と同じ、寂しそうな泣き声が下から聞こえてきた。

見下ろすと一匹のゴールデンレトリバーが寂しそうな顔であたしの顔を見上げていた

「…デン君っ」

我が家の愛犬。ゴールデンレトリバーからゴール“デン”…そう、お父さんに名づけられた。

確かバーベキューの時は、隣の智ん家にいるはずなんだけど…どうしてここに？

って…まぁ大体予想はつくけどね…

智の家の愛犬ベル君はドー“ベル”マン。

智に育てられたせいか犬のくせに物凄く…冷めた性格をしている

人懐っこくて甘えん坊のデンが『遊んで遊んで』を繰り返して、ベルに『ウザい』とでも言われたんだろう。

［11］

「うー可哀想なデン君！」

思わず抱きしめてしまった

「こーら慶ちゃん邪魔邪魔っ！どっかいっててて」

って…あたしも可哀想。

仕方なく近くの台においてあった大きなペットボトルの中身を紙コップに少しだけ入れて

庭をあても無くデンと彷徨った

「花壇に座るか…」

と赤いレンガが詰まれた花壇に近づいたものの、アリさん達が行列を作っているので座れず

庭の片隅に置かれた木製の白いブランコに近づいたところで、鳥のピーーーが目に入ったので回れ右。

結局行き着いたのは、プールだった

3月上旬、卒業式間近の今では水もはってなくて、プールの窪みに足を垂らすとベンチ代わりにもなるし丁度よかった。

それを見てデンもあたしの隣に座る

「デン君、晴れてて気持ちいいねーっ」

思わず寝転がると芝生がチクチクと刺さる

けど

青くて高い空が凄く綺麗だった

――――鼻をくすぐるおいしい香り

「い…おぃ…け…」

――――途切れ途切れに自分を呼ぶ声

「け……い…慶っ！」

「うぁっ！！」

耳元で叫ばれて思わず跳ね起きた

「『うぁっ！！』じゃねーよ。こんなとこで寝たら、また風邪ぶりかえすぞ」

周りを見回せばバーベキューコンロのところから白い煙がもくもくとたって、おいしい匂いを当たりに広げていた

ベンはあたしにぴったり寄り添って、まだ静かに寝息をたてている

ああ…いつのまにか寝ちゃってたんだ

「あたしどれくらい寝てた？」

口は悪いが面倒見がいい智はあたしの洋服についた芝をはたきながら答えた

「ほんの１０分。」

ぽたぽたと背中をはたく智の手が気持ち良い。

ふと背中をはたく手が止まった

…？

首をかしげながら彼を見ると少し困ったような顔をしていた

「智どしたの？」

「ン？いや…なんか昔のこと思い出して、さ」

「む、昔のこと？」

ギクッ。自分の中でそんな音がした気がする

「そう。昔のこと。ちょうど3年前…覚えてる？」

忘れるわけがない…でも、思い出したくない。

お兄ちゃんみたいに先を突っ走ってって、弟みたいに危なっかしくて、、、本当の兄弟のように慕っていた人が、突然“男”だと認識した日を…

目の前にある智の唇から逃げるように立ち上がった

「…携帯。部屋に携帯忘れたから…取ってくる」

携帯依存症なわけじゃない。携帯とってくるなんてただの口実。

「おいっ！慶！」

とにかく智から逃げたかった。

…ごめんね、智。

ぽつりとつぶやいた言葉は風に吹かれて虚しく散った

【12】

どこか気まずそうな自分たちの子供を横目に、４人はテラスでテーブルを囲む

「万理ちゃん、ビールおかわりする？」

どこにいても慶の母親の鈴（リン）は世話係らしい

「ううん、明日大事な仕事があるのよ、二日酔いにでもなったら困るし遠慮しとくわ。」

そう言って、智の母親の万理子（マリコ）は残り少なくなったグラスをテーブルにおいた

そして、グラスについた真っ赤なグロスを親指で拭き取りながら再び口を開く

「久しぶりに見たけど、慶ちゃんまた大きくなったわね。」

「万里子さん、それ嫌味じゃない？」

慶の父親の正史（タダシ）が苦笑いを浮かべて焼けたばかりの肉をほおばる

万里子は慌てて顔の前で両手を大きく振った

「そういう意味じゃなくて…えーっと…なんていうか…」

綺麗に整った顔が歪む。

そんな顔を見ていられなくなったのか、彼女の夫であり智の父親の悠平(ユウヘイ)が口を開いた

「万里子は慶ちゃんが『大人っぽくなった。』って言いたいんだそうだ」

「そうそうそうそう!!慶ちゃんすごい綺麗になった!!なんで悠平あたしの言いたいことわかったの?」

「いやー実は俺もそう思ってたんだわ!慶ちゃんめっちゃ別嬪さん!!って!」

その台詞に喜ぶべき慶の両親は苦笑を浮かべる

「なんだか私、万理ちゃんと悠くんがナルシストみたいに見えてきちゃった」

「そうだね…でも鈴、僕らも同じだろう?」

夫のその囁きに鈴は微笑んだ

「ふふっ、そうね。智くんもかっこよくなった！」

子供たちにはまだ知らせていない。

鈴と正史の間に生まれた“慶”と名づけられた赤ん坊が本当は男の子だったこと。

万里子と悠平の間に生まれた“智”と名づけられた赤ん坊が本当は女の子だったこと。

…それがどうして今、逆なのか。

血の繋がらない両親に育てられ、肉親は幼馴染みの親だということを本人たちが知るのは

まだずっとずっと先のこと———

［13］

まさか智も昔のことを考えるなんて思わなかった…あんなの絶対に後悔して忘れると思ってた。

靴を乱暴に玄関で脱ぎ捨て、火照る顔を手で扇いで冷ましながら、階段を上る

———あの日もそう…今日みたいに空が青くて高かった

『やだっ…行かないで』

智が遠くに行ってしまう現実を受け入れられないまま、彼の洋服の裾がしわしわなるまで握りしめてた

あまりに頑固なあたしに、智の両親も自分の両親もあきれてどっかに行ってしまった

智と2人、家の庭に寝転んで空を見上げた

『だからさ…高校生になるまで待ってろよ』

『やだ。』

『絶対に帰ってくるから』

『…絶対の絶対だからね。』

とまったはずの涙がまた溢れそうになる

智は言った

『わかってる。』

強い強い声だった

日暮れ方、隣りの家に帰ろうとする背中に問いかける

『ねぇ、ひとつだけお願いきいて！』

何？

そう少し怪訝そうな顔で振り向いた彼に遠慮なく告げる

『月1でさ、うちの庭でバーベキューしよっ！』

『はぁ？お前どんだけ遠くに引っ越す……』

彼の言葉を遮ったのはあたしの頬を伝う涙だと思う

『月に1回でいい。…帰ってきて。』

夕陽に重なって彼がどんな顔してるかなんて分からなかった…でも

一度だけ大きく頷いたのがわかった。

…これでいい。これでいいんだ。

あとは笑顔で送り出してあげるだけ

『智、行ってらっしゃい。』

あたし、笑えてるだろうか？

濡れた頬のままできる限りの笑顔をした

すると智は何を考えたのか駆け寄ってきた

『3年後、中学卒業したら絶対に帰ってくるから…』

あたしにしか聞こえないくらいの小さな声でそういうとゆっくり顔を近づけてくる

唇がそっと当たって逃げてった

いままで家族みたいに慕って、兄弟みたいに育ってきた人が、崩れて、

その瞬間…男の子に変わってしまった…

その翌日、

泣き腫らした目を擦りながら下に下りると、賑やかな感じがドア越しでもわかるくらい…凄かった

お別れだっていうのにどうしてそんなに明るいの？

怒りがふつふつと沸いてきて、全力でドアを開ける

『どうしてそんなにワイワイできるのっ？！寂しくないのっ？！』

あたしの怒りとは裏腹にみんなはとても穏やかだった

智パパがそんなあたしをなだめるように口を開く

『それがさ、理事長が行かなくていいって言ってくれてね。』

『へ…？』

何がなんだかで放心状態のあたしを智ママがソファーまで連れて行って座らせた、そして耳元ではっきりと言う

『引越しは中止よ！！』

［14］

中止！

智ママのあのセリフが今でも頭に残ってる

引越しの中止で智と約束した月1のバーベキューも中止かと思いきや

中止決定直前に智が智ママに話していたらしく…智ママの大賛成で、

必要もないのに3年経った今でも毎月決行中。

今日はその記念すべき3周年、ってわけ。

…てっきりこっきりあたしの頭から忘れさられてたけどね。

机の上においてあった携帯から充電機を勢いよく抜いて、そのまま

ポケットに突っ込んだ

「智ほんと気が早いんだから」

言わなきゃ智だって『めんどくせぇ』とかいって嫌々バーベキューしなくてすんだのに

「それに…バカ」

…あのキスもフライングに違いない。

「誰がバカだって？晩年2ケタのてめぇに言われたくねーよ。」

「ちょっ！！なんで部屋までついてんのっ？！」

「あ？もうここは俺んちみたいなレベルだろ。」

…でたよ。俺様智様。

てかどんなレベルだし…

「部屋とか勝手に入ってこないでよねっ」

「分かってる分かってる」

壁に寄りかかって携帯いじりながら返事されたって説得力ないっつ

の！

「何が『分かってる分かってる』よ！あんた絶対分かってないでしょ！」

怒りのあまり手を力いっぱい握り締めたとき

ポケットに忍ばせていた携帯が鳴った

小さなディスプレイに流れる文字、

“桐生（キリュウ）　章（ショウ）”

部活の先輩で今は高1。男子バスケ部の前キャプテンだ。

「誰からメール？」

あんたに答える必要ないでしょ。とか思いつつ

「桐生先輩」

ちゃっかり口が動いてしまう

「桐生か……内容は？」

…

…

「ねぇ、なんであたしがそこまで教えなきゃいけないわけ？」

本当にお母さんといい智といい…

どんだけ人に干渉すれば気がすむの？

「内容は？」

「…智しつこい。」

いい加減にしてよ、とか思いながら階段を駆け下りて玄関でさっきのパンプスを履いた

「内容は？」

ホントしつこい！

「あぁもうっ高校のことだよッ！！」

絶叫しながら智を中に残したまま玄関のドアを全力で閉めた

何事もなかったかのように庭に戻ったものの、足は嘘をつかなかった、

ガツガツと庭の土がえぐれる。

そんなあたしを知ってか知らずか、智ママが気持ち悪い笑みを浮かべながらテラスに手招きしてきた

「あれー？智のバカも一緒じゃないのー？」

「すぐ来ると思いますよ。」

そういって１０秒もしないうちに智がやってきた

「んじゃメンツは揃ったということで！」

楽しそうに笑う母親２人の顔と、哀れみを向ける父親２人の顔。

…それからのことは良く覚えてない

ショックっていうか…なんつーか…

「ねー見た？あの智と慶ちゃんの顔っ！」

「見た見た！開いた口がふさがらないってああゆう顔のことだよね！」

万里子と鈴は有頂天だ。

一方で正史と悠平は、眉を寄せて子供を哀れむ。

「なぁ、いくらなんでもあれは可哀想すぎねぇか？」

「そんなことないわ！青春は一度しか来ないのよ、楽しまなきゃ損じゃない！」

楽しんでるのはガキたちじゃなくてお前らだろ。

なんて口が裂けても言えないのは、こんな女に惚れて結婚した男が悪い。

「「はぁーーー」」

父親２人は顔を見合わせてため息をだすしかなかった———

女なのに男みたい。男なのに女みたい。

そう言われるだけだった…

ここからが本当の逆転生活。

［15］

慶智大学はお坊ちゃまお嬢ちゃま学校で、幼稚園からのエスカレーター式になっている

偏差値も高く、施設充実のため学費も馬鹿にならない金額。幼稚園から大学から一貫して通い続けられる人はほんの一握りだ。

慶と智はそのほんの一握りのうちの2人に入る。

そして先日、附属高等部に進学するにあたって附属中学で説明会が開かれた

慶智大の附属高校は3校。

由緒正しき100年の歴史を持つ男子高と女子高、それと昭和に創立された共学。

学校名はそれぞれ

男子校が“慶智大学附属松ヶ丘（マツガオカ）高等学校”

女子高が“慶智大学附属櫻之葉高等学校”
共学が“慶智大学附属近木高等学校”

松ヶ丘と櫻之葉は定員がそれぞれ１２０名。近木が２４０名。あわせると附属高の定員は３６０名。

附属中の３年生は３校あわせて４００名弱。

…そして倍率は毎年のように１０倍を軽く超える。

附属中学に通っていたからといって成績が悪ければ簡単にバイバイと言われてしまうわけだ。

そんなこんなで慶も自分の将来を不安がっていたものの、どうにかこうにか2月末に櫻之葉への正式入学が決定し、喜んでいた。

もちろん智も松ヶ丘の入学が決定。

受験生も終わり、ふらふらと学校帰りに遊びに行ったり、心はもう高校生！だった…が、

―――バーベキューの日、テラスにて

『慶ちゃんは松ヶ丘、智は櫻之葉に入学が決まったわよ！！』

【16】

ストローで意味もなくコップの中の氷をクルクルと回し続ける

「なぁ…慶、どうする？」

ふと智が口を開いた

「どうするって何を？」

残り少なくない氷で薄まったオレンジジュースをわざと汚らしい音をたてて吸い込む

「お前…怖くないわけ？」

「…何が？」

「だからっ…その…お前が俺として男子高に…っていうか松ヶ丘は

全寮制なんだぞ?!わかってんのか?!」

それはあんたも同じでしょっ!!

あたしは手に持っていたコップを広い部屋の中央に置かれたローテーブルにたたきつけた

「智さ、本当は嬉しいんじゃない?桜之葉のカワイイ女の子たちに囲まれることになって。第一、あたしは絶対に女だってバレない自信あるから平気。」

勢いよく立ち上がって、ぽかんと口を開けて座っているチビに自分の長身を見せつけて部屋をでた。

通いなれた智の部屋、この廊下、

彼の部屋から出て玄関に向かう途中にある中庭に足を止めた

洋風な我が家とは対照的なこの家。

中庭の紅葉の足元に青々としたコケが隙間がないほど広がって、おしゃれのために埋められた飛び石がそれらしい雰囲気をさらに引き立てる

小さい頃、この中庭を囲う廊下でよく追いかけっこをした

ともくんね、大きくなったらけいちゃんをおよめさんにするのっ！

そんなことを言われたのもここだった。

…まあ、あれは若さゆえの過ちでしょう。

あたしはあんな口の悪い旦那さん欲しくないもん。

再び玄関に向かって歩みを進めながら、携帯をひらいた
親指が電話帳の“カ行”から一人の名前を探す

綺麗に揃えられたパンプスを履いて、一度振り返ると、長い長い廊下の先で寂しそうに紅葉の木が揺れていた…

「もうここも最後かな。バイバイ、智。」

ドアを閉めると同時に通話ボタンを押す
耳に近づけた携帯は電子音をスグに終わらせて男の声を響かせた

《も、もしもし…》

緊張して噛み噛みの彼に思わず笑みがこぼれる

「ふふっ桐生先輩、何でそんなに緊張してるんですかぁ？」

《いや…その…あの…返事をっ！返事を待ってたからっ！》

携帯片手に彼がどんな姿か安易に想像できて笑えた

「1時間後に慶智大第三体育館に待ち合わせで！」

《えっちょっ》

返事を聞く前に一方的に電話を切った

【17】

家に帰って、部屋に上がると上着と財布、バスケットボールとシューズを持ってリビングに下りる

「あら？これから出かけるの？」

たまねぎ片手にお母さんが不思議そうな顔で見つめてきた

「うん。第三体育館までちょっとね。」

出かけ先が第三体育館とここから自転車で１０分ほどだからか、いつもは厳しい母親も今日は普通に送り出してくれた

「暗いから、気をつけてね。」

「分かってるって、いってきます。」

3月と言ってもまだ頬にあたる風が痛い

自転車でスピードを出していると尚更だ。

体育館の前に無造作に自転車を停めて、カゴから荷物を取り出して重いドアを開けた。

パンプスはその場に置いていき、中を歩く

「うわー寒っ！」

足が痛くなるほど寒かった

適当なところに座ってシューズを履き、かじかむ指でボールをつく

投げたボールは綺麗な弧を描いてゴールに吸い込まれる
落ちたボールは床にあたって大きな音を響かせてから、しばらくい
たずらにぽんぽんと跳ねて静かに止まった…

ぴくりともしないボールを大きな手が拾いあげる

「久しぶりだね…慶」

「…桐生先輩」

背が高くて、顔も頭も運動神経もいい、そのうえ真面目、
天然なのは別にして、人が羨む全てを持った人だ。

「附属中学にまで聞こえてきますよ」

「…？」

あたしの言葉に何がなんだかといった様子で彼は首を傾げる

「先輩ってば桜之葉の人からも、近木の人からも、他校の人からも、
めっちゃモテモテなんだって」

いたずらっぽく舌を出すと、先輩はすごい勢いで慌ててボールを手

から落とす

「け、慶っ！でもっ俺はっ」

「知ってますよ。“好きな子がいるから応えられない”ですよね？」

先輩は大きく頷いた

「桐生先輩…あたしなんかのどこがそんなにいいんですか？」

今まで聞きたくて…でも怖くて聞けなかった言葉

「あたし…デカいし、男みたいで少しも可愛くないのに…どうして？」

俯いていた顔を少し上げると、先輩の胸が見えた

優しく頭に手を置かれてポンポンと撫でられる

「俺からしてみれば慶は小さいよ。それに今日びっくりしたんだ…あんな踵の高い靴、どんな綺麗な女の人が履いてるんだろうって…」

大きな手に、トクンと心が鳴る。顔も熱い。

「…で体育館の中見て驚いた。部活引退して髪のばしてるし、この服もそう。どこからどうみたって女の子だよ。」

ふわっと先輩の香りがしたかと思うと、心地よい温かさを感じた

「抱きしめるともっと分かる。…華奢で…脆そうで…この子を俺が守ってあげなきゃって…」

首元に顔を押し付けられて、、、顔が火を吹きそうなほど火照っているのがわかる

「せ、先輩っ…」

その声でようやく我に帰ったのか、慌てて離れてペコペコと謝ってくれた

「ごめんっ！俺ってば…ほんとごめん！」

その顔は真っ赤で、照れてるのが自分だけじゃないってわかってちょっとほっとした

「…にしても…本当に綺麗になったな」

改めて言われると更に恥ずかしい。何も言えずに俯いた。

「櫻之葉のアレ来たら男が物凄い寄ってきちゃうよ絶対。誰かに取られちゃうないように俺頑張る！」

櫻之葉のアレとは制服のことだ。

胸ポケットに大きなエンブレムが目立つ白いブレザーは、折り返しの袖の淵と襟と裾に黒ラインが一本。

黒いワイシャツにピンク色のリボン、

ブレザーと同じく裾に黒ラインが一本入った白い短めのプリーツスカート。

附属中のありきたりなセーラー服とは大違いで

とあるテレビ番組の“人気の制服１０選”とか意味不明な特集にも選ばれていた…

こんなナリでも、櫻之葉のあの制服に憧れてた。

…でもね、先輩…あたしは

「あの制服着れないんです。」

あたしの言葉に桐生先輩は目を丸くする

「…なんで？まさか共学…近木にしたのか？」

なにも言えずにただ首を横に振る

「じゃあ…まさか…附属じゃない高校？」

やっぱり…先輩も思いつかない、か。女が男子校に通うなんて…

いま先輩に言えるのはひとつだけ

「桐生先輩、あたしがどんな格好してても…嫌いにならないで…好きって言って笑ってくださいね」

“当たり前だろ”口には出さなかったけど、唇にあたる熱が先輩のそんな気持ちを伝えてくれた――――

［18］第2章　高校生

「ほらっせっかくの入学式なんだから2人とももっと笑って！」
桜の花が少しずつ散り始めた頃、
ようやく高校の入学式を迎えた

「…笑えるかっつの」
“僕”の隣に立っている口が悪い“女の子”はもの凄くイライラしてるらしい
「ねぇ、なんでそんなに怒ってんの？」
「…似合わない制服を着せられてるから、だ！」
はっきりいって似合わないと思ってるのは本人だけだ。

春休みの間、智ママにどんな特訓をうけたのか知らないけど…少し内股なってるし

何より…エクつけてロングにした髪をゆるーく巻いてるのが…まじウケるっ…似合いすぎだろーっ！

笑い声が漏れそうになるのを必死にこらえる…が、バレないはずがなく

「てめぇっ笑ってんじゃねーよっ！」

軽く肘で小突かれた

そんな隣の人に対して自分は、慶智大学附属松ヶ丘高等学校の制服が意外に気に入っている

櫻之葉と同じで、着たままじゃ絶対にカレーうどん食べれないような非実用的な感じの制服。

グレーの学ランで、腕にエンブレムが付いてる、すごいカッコイイやつ！！

コレ着てたら絶対に女だってバレないと思うんだよね。

「ほら、２人ともそろそろ行かないと遅刻しちゃうよーっ！」

智ママの急かす声で構内へ急いだ

桜並木を２００メートルほど歩くと、たくさんの新入生がいて

その新入生を誘導するために腕章をつけた在校生が声をはりあげていた

「櫻之葉の方は右手に見える大きな桜の木の方へ進んでくださーーい！」

「近木の人は左の坂を下って行ってーっ！！」

「松ヶ丘は正面の黒松の方っ！」

ふと足を止めて、向き合った―――

「慶……って慶じゃねえんだよな。…じゃあな智。」

目の前の女の子は、長いニセモノの髪を風に揺らせて呟いた

そう、もう…あたしは慶じゃない。僕なんだ。

僕は智なんだ。

「うん。け、慶も元気でね？」

「分かってる！元気じゃない俺様なんて俺様じゃねえしなっ！」

…俺様も、もう最後なんだね。

なんだか今更…男になるのが嫌になってきた。

そんなこと口に出せないけど、もう引き返せないけど、、、

これ以上ココにいても、櫻之葉への夢しか生まれない

「じゃあ…僕もう行く。」

あたしは目の前の真っ白い制服から、一段と大きな黒松に目を向けた

あの黒松の向こうには外と絶たれた違う世界がある。

肩をつつかれ、振り向くと…

「では…寂しいですけれど、わたくしももう行きますわ。」

…慶になりきってる智がいた。

「…なんやかんや嬉しいんじゃん」

「智さん、何かおっしゃいました?」

「…いえ、別になにも言ってませんけどー?」

「あら、わたくしの空耳でしたのね。申し訳ないわ。」

ふと頬に手をやる仕草もなんもかんも、智のやつ完璧女になりきってやがる!!

「では智さん、ごきげんよう。」

「…ご、ごきげんよう。」

あたしの返事に満足したのか、智はスカートの裾をひるがえして颯爽と桜のほうに去ってった

…これがきっかけで、女装癖とかつかなきゃいいけど。

幼馴染が女装好きなんて、考えるだけで身の毛がよだつ…

けど、そんときはしょうがない…のかな。受け入れてあげよう。

そんなことを考えながら、あたしは黒松の元に歩みを進めた

【19】

「うっ…」

黒松のむこうは本当に別世界だった。

校舎前の少し広いロータリーに約１２０名の新入生…てか男がそれぞれ群がってなにやらガヤガヤ話している。

唯一の女であるあたしは、当然話し相手がいない。

話しかければいいんだろうけど…話しかけられない。いまいち男になりきれてない自分に嫌気がさす。

前途多難ってこういうことを言うのね、神様。

「はぁーーー…」

女っていう生き物はどうして誰かとつるんでなきゃ寂しいって思っちゃうんだろ…

寂しさを紛らわすために、ひとり人込みから外れた花壇に腰掛けて校舎を眺めていたら

校舎の窓がひとつ開いて、入学式とこの制服と学校の雰囲気につりあわない地味な拡声器を手にした男が顔を出した

少し長めの髪をワックスで軽く立たせて、黒ブチのメガネをかけた、今風のお兄さんって感じ。

その人は、開けた2階の窓から拡声器で声をロータリーに響かせる

「新入生、入学おめでとう。左手に見える門をくぐって進んだ先、昇降口の前に君たちのクラスが掲示されている。各自確認したのち昇降口で上履きに履き替え、速やかに4階に上るように。タイムリミットは15分！守れなかったものには……それなりの処置があるからな。時間厳守だ！以上！」

タイムリミットって言われて、罰もあるって言われると、人間ここまで変われるものなの？！

さっきまでのお気楽ムードは何だったのか…120人の塊が一気に昇降口めがけて動き始めた。

みんな罰を受けないために、昇降口に繋がる狭い門に殺到して、団子状態だ

自分もその波に乗ろうとしたものの…

「うわぁっ！」

弾き飛ばされて上手く流れに乗れない。

…気づけば最後尾。

「やばい…まじでやばい。」

先がどうなってるか確認するためピョンピョン飛び跳ねて見たものの…あたしが思ってるほど、みんな背が低くなかったぁっ！！

お先真っ暗！！

「マジヤバイ…」

「“やばい”じゃなくて少しは努力したらどうなんだ？」

「…きゃあっ？！」

後ろから、それも結構な至近距離から声がしたせいで思わず、“きゃあ”なんて言ってしまった。

———バレタカモ。

ふと脳裏によぎる智ママとお母さんの声

『正体が周りにバレたら退学だからね。それも連帯責任で。かたっぽバレたら、もうかたっぽも退学になる。言ってる意味、理解できるよね？』

バクバクと鳴る心臓。恐る恐る振り向いた…

「あっ！」

振り向いた先には、さっき2階の窓から喋っていた人が立っていた。
思ったより背が高い。思わず見上げてしまうくらいに…

「トロくさい上に…声変わりもしてないのか、キミは。」
「ト、トロくさいって酷くないですか?!僕、トロくさくなんかないです!!」
それに…この人、無駄に美形っ!
「トロくさすぎる。周りを見てみろ、バカ。」
形のいい唇から出る言葉は刺々しくて…ちょっと智に似てる。

［２０］

「ま、まわり？」

促されるまま辺りを見回すと…

「えーーーっ！！誰もいない！！」

さっきまでうじゃうじゃいたはずの新入生の塊が、門の奥、３００メートル先の昇降口であろうところに見えた

「ぼ、僕どうすればいいんですかっ」

早速の災難に、目が潤む。潤んだ瞳で背の高いその人を見上げると、ため息をつかれた

「はぁー。…お前のその細っこい体で昇降口まで走れって言ったら小一時間かかりそうだな。」

そのまま腕をつかまれて昇降口とは違う方向に引っ張られる

「えっ？ちょっ…あのっ」

「お前、名前は？」

「弓月(ユヅキ)ですっ…弓月　智っ。」

――それから、【生徒会室】と書かれた部屋に連れて行かれ、新入生名簿でクラスを調べてもらい、教室のある４階まで来た。

ここは昇降口から遠いらしく人気がない。遠くで新入生が騒いでる音だけが廊下を反響して聞こえてくる

「ここは入学試験に体力検査があるはずだが…理事長は顔重視に路線変更か？」

「…どういう意味ですか？」

そう聞くと、中指でメガネの位置をそっと直して彼は言った

「いや、なんでもない。それよりお前、痩せすぎだ。少し筋肉つけないとココじゃやってけないぞ。」

「…は、はあ。」

「じゃあ俺はまだ仕事があるから失礼する。もう迷うなよ、弓月。」

その姿があまりにもかっこよくて思わず見入ってしまった。

彼は階段を下りつつ片手を上げて、後ろにいるあたしに手を振った

「あ、名前聞き忘れた…てかお礼さえ言ってない。まっいっかー、二度とかかわりなさそうだし。」

そしてあたしも智として、“１年Ａ組”に向かった――――

真っ白い壁に、窓から入った日光が反射して眩しい。

「おはようございます。１年Ａ組の担任の―――」

２０センチほどの高さの教壇の上で、一人の男が黒板に白いチョークで丁寧に字を書く

“越坂部　京”

「こう書いて、オサカベ　ミヤコって読みます。」

へぇ～…変な名前。

越坂部京は見たところ２０代後半くらい。とても真面目そうな人だ…

「えーと…僕のことはどうでもいいとして、いちおう皆さんの名前の確認します。返事をしてくれたほうが嬉しいですが…挙手だけでも結構です。僕が名前を読み間違えていたら訂正してくださいね。」

そういうと、教卓の上においていた筆箱からペンを取り出して、名

簿の一番上から順番に読み上げていった。

…どうしよう…なんか名前呼ばれるだけなのに…無駄に緊張するーっ

「では次、出席番号３９番……ゆみつき　あきら、君かな？」

ま、まちがえてるっ！！おもいっきり間違えてる！！

あたしの前３８人を間違えなかったのに、どうしてあたしだけ間違える？！

「…ゆづき　とも、です。」

「ゆづき　とも君ね。ごめんね、ありがとう。」

「い、いえ…大丈夫です。」

もう心臓がばっくばく。

『慶ちゃんは声が高いんだから、できるだけ大勢の前で喋らないようにね。』

ただ自分の席に座ってるだけで“退学”の文字が脳裏をかすめる。

バレちゃいけない。バレちゃいけない。
バレちゃいけない。バレちゃいけない。
バレちゃいけない。バレちゃいけない。

「弓月。」

「！！」

「ははは っ！お前、肩つつかれたぐらいでビビリすぎ！」

…突然肩つつかれて驚かないバカはいないだろ。

「…え、えーっと」

後ろの席に座ってるってことは…名前が“ゆ”か“よ”から始まる人なんだろうけど…

「俺は横井（ヨコイ）。横井　はやと。」

「よ、よこい君…何か用かな？」

「周りみてみろよ。」

…このパターンってまさか…まさか…恐る恐る首を回すと、やっぱり

「誰もいないっ！！えっ！みんなどこ行っちゃったのっ？」

［21］

そんなあたしに横井は飽きれたようにため息をつく

「どこって…さっき越坂部が言ってただろ？」

…え？なんか喋ってたっけ？

己の過去を振り返ってみたものの…

“退学”

の2文字を考えていた自分しかでてこない…

「…ごめん。聞いてなかった。」

「いや、俺に謝られても困るんだけど。」

「僕にどこに行けばいいか教えてくださいっ！！」

全力で頭を下げたら、机にぶつかって、2人きりの教室に痛々しい音が響いた

「痛っ！！」

ヒリヒリするおでこを両手でさすると、手と手の隙間から横井の顔が見える

不思議そうな、何か疑問を抱えてるような、そんな顔。

「…お前、女じゃねえよな？」

……っ？！

『連帯責任だからね。』

智ママの声が頭の中に反響する

智を、智をもうこれ以上困らせちゃいけない…これ以上、智の足手まといにはなれない…

「ぼ、ぼくはっ…」

なんて言えばいい？

どうすれば逃れられる？

助けて、神様っ！！

――その時、教室に神が降臨した

神は、あたしたちに近づいてくる

「横井くん、ここは男子校ですよ。女性がいるはずないでしょう。」

そして神は、僕らに微笑んだ

「横井くんは先に行ってください。私は弓月くんに名前を間違えたことをきちんと謝らなければなりませんから。」

神の笑顔に逆らえる人間はいないのだろう

「は、はあ。」

横井は不服そうにだが言われるがまま教室を後にした

神、こと担任の越坂部京は、あたしの前にどしっと構える

「弓月くん…無鉄砲って言われるでしょ。」

さっきとは打って変わって無邪気に笑った顔は、神って言うより…小悪魔？

何も答えられずにうつむくと、そっとアゴをつかまれて顔を無理やり持ち上げられた

「本名、一ノ宮　慶。男子校の紅一点。」

「…えっ…どうして」

「慶ちゃんのパパに『慶をよろしくー』って頼まれちゃって。」

ってことは…味方っ！

と思えたのは一瞬だけだった

———チュッ

「ちょっ！！何するんですか！！」

「何って、キスだけど？」

キスだけどってそんな平気な顔で言わないでよーっ

顔が火を噴きそうなほどに熱くなった

「どどどどどうしてキキキスなんてするんですかっ！！」

「どうしてって…なんでだろう？キスしたいなーって思ったから。」

こ、この人はっ！！

怒鳴ってやろうと思いっきりイスから立ち上がったものの…

「ゆっ弓月ッ！！」

…貧血で自分がノックアウト。

［22］

「んっ…」

瞼を開けたものの…頭がぼーっとして何がなんだか。

脇に流れる景色を見るに、車に乗ってるってのが分かるくらいだ。

って…く、車っ？！

「あたしどうして車に乗ってるの？！」

さっきまで教室にいたのに！！

助手席で錯乱するあたしに、運転席の人がクスクス笑う

「“あたし”とか言ってたらバレちゃうよ？」

窓から運転席に視線を移すと、目鼻立ちのくっきりした人がハンドル片手にタバコを吸っていた

「…だ、誰？」

「誰って…俺だよ、俺。お前の担任の越坂部京。」

「……えーーーっ！！」

あの超まじめそうな先生？！

タバコとか吸わなそうなのに

てか俺って言った！いま俺って！

そんなあたしの心の内を読んだのか、苦笑しながら彼は喋った

「教師だってタバコくらい吸うし。それに教室のアレはキャラづくりだから。本当の俺はこっち。」

あんぐり開いた口のふさがらないあたしを横目に彼は車を走らせ続けた。

車は高層ビルの隙間をすごい速さで走りぬける

あまりの速さに不安はつのる

「あの…こんなにスピード出してドコ行くんですか？」

あたしのその質問に運転主は若干キレながら答えてくれた

「慶智大学大講堂！」

「あ、あのー…何で怒ってるんですか？」

…聞いちゃいけないことを聞いたらしい。

突然、車が大きく揺れた

「お前のせいだっ！！このバカっ！！」

車が左に急カーブを切った遠心力で、シートベルトをしていなかったあたしは、あっけなく先生の膝元に顔面から突っ込んだ

「痛っ！！」

「８時４５分、クラス一台用意されたバスに乗り込み、９時前に大学の正門前で下車、その後徒歩で大講堂前集合。それをお前がグダグダと横井と教室で駄弁ったうえに、ぶっ倒れやがって…予定が狂った！！俺も巻き添えで別行動だ！！今頃、クラスの連中は大学に着いてる頃だろうよ！！」

体を起こしながら平謝りだ

「ご、ごめんなさい。あの…間に合いますか？」

「…間に合わなかったらお前のせい。」

「…いや、もう、ほんと、すみません。」

謝るしかない、、、最悪。

［23］

急いでるときばっかり信号は赤…それもいつもより長く感じる。

エンジン音だけが響く中、越坂部が口を開いた

「人の話ぜんぜん聞かないし、能天気だし、……お前…万里子さんにそっくりだな。」

…万里子？

「万里子って智ママのことですよね？」

そういうと一瞬だけ越坂部の様子が変になった

「ああ、そうそう、本物の弓月智の母親。お前、智の母親にそっくり！隣の家だと少なからず似るんだよな！」

…？

「へぇ…そんな話初めて聞きました。僕も将来、智ママみたいに綺麗なれればいいんですけどね。」

というより…どうして智ママのことを知ってるんだろう。

聞こうと思い、口を開こうとした丁度そのとき、越坂部が急に大音量で音楽をかけ始めた。

この音量じゃ会話もままならない。

そっと彼の横顔を見ると、さっきより少しだけ赤く、血色がよくなっているような気がした――

「ほらっ早く走れっ！」

「は、はいっ…」

あんたとは足の長さが違うんじゃいボケ！！

返事とは裏腹に心の中で悪態をついて、右手首をつかまれ半分引きずられるような形で、ゆうに１８０センチはあるだろう越坂部京の背中を必死に追いかける

長い坂を上りきると、レトロな雰囲気の漂う大きな建物がそこにあった…

建物の前の広場には、松ヶ丘の制服でできたグレーの塊、桜之葉の制服でできた白い塊、近木の制服でできた紺の塊があった。

越坂部は迷い無くグレーの塊にあたしを突っ込む。

「いいですか弓月くん、人の話は良く聞くんですよ？」

周りにたくさんの生徒がいる今は、すっかり教師モード。本当の彼を知ってしまったあたしからすれば…教師モードの越坂部はめっちゃキモい！！

「は、はぁ…わかりました。」

顔をそらしながら返事をしたら、越坂部は少し不機嫌そうに去ってった

越坂部が去った直後、前方の台に初老のおじさんが上って喋り始めた――――

［24］

１０分かかった、おじさんの話を要約すると…

入場は近木から。近木が入場した後、松ヶ丘Ａ組が１列になって、その隣に桜之葉Ａ組が１列で…、あとも続けて松ヶ丘Ｂ・桜之葉Ｂ組、松ヶ丘Ｃ・桜之葉Ｃ組。というような組み合わせで入場。

とにかく、男女一緒に入場させたい！！

ってことで…並ぼうとしてるんだけど…入学初日の初めての集団行動は…無理がある！！

教師たちは、どっかで会議とかで…子供だけ。それも名簿もなくて…自分たちの記憶と出席番号だけが頼りだ。

「松ヶ丘Ａ組２１番ダレっ？！」

「桜之葉Ａ組８番はどなた？」

「B組11番!!」

「松ヶ丘Aの21誰だって言ってんだよ!返事くらいしろよ!」

…もう何がなんだか、涙が出そう。こういうの苦手。

耳を塞ぎたくなる気持ちを必死にこらえて立ちすくんでいると

「弓月、お前もっと後ろだろ?」

腕をぐっとつかまれた

「…横井くん!」

「くん付けとか気持ち悪いから“はやと”って呼んでくんね?」

そういいながら、腕をひいて騒々しいところから少し静かなところへ連れ出してくれた

メシアだ!あたしのメシア!

「ありがとう、はやと!」

あの環境から抜け出せたことが嬉しくて、自然と顔がほころぶ。

「お、お前…やっぱり…」

はやとがそう何かを言いかけたところで、彼の頭に何かがすごい勢いで当たった

―――ゴツン！

鈍い音が響く

「いってっ！！」

「どうしたの？大丈夫？」

頭をさすっている彼の手をどけて、後頭部を見ると、何が当たったのか少し血が滲んでいた

「すげぇ痛いんだけど…俺の頭大丈夫？」

「うん。病院行くほどじゃないと思う。」

とにかく、滲んだ血が髪の毛を伝って、おろしたばかりの制服を汚さないうちに一度拭き取らなきゃだめだ

制服のポケットに手を入れてハンカチを取り出そうとしたら、突然となりから伸びてきた手があたしの手を止めた

真っ白の桜之葉の制服で、女の子にしては少し骨ばった手。

その人は、あたしとはやとの間に入って、真っ白いレースのハンカチをはやとの頭にあてた

「…大丈夫ですか？傷、痛みます？」

…この声、この髪型、、、

間違いない…智だ。

「すげぇ痛い。」

はやとは、誰に傷を押さえられてるのか分からないのに、平然と返事をする。

「それは大変、お医者さまのところへ行ったほうがよいのでは？」

「大丈夫、俺じょうぶだけが取柄だから。」

智は“心配心配！”って感じで言ってるけど、あたしは気づいてた。

智の右手の指先に…泥がついてる。それに近くに少し大きい石。

「でも、あとから何かあったじゃ遅いんですよ？わたし心配です。」

わたし心配ですって…あんたが、はやとに石投げたんだろーが…

「ほんといいって。てかごめんね、俺のせいでハンカチ汚しちゃったよね」

はやと！こんなヤツに謝らなくていい！

とも言えず…そっと2人を見守ることにした

「ハンカチ新しいの買って返すよ。」

「そんなっ大丈夫です。そんな気を使わせてしまうなんて、わたしの行いが良くなかった思いになりますもの。」

「でもせっかくの綺麗なハンカチを汚してしまったし…」

はやと意外にめっちゃ紳士…

「いいえ、気になさらないで。それにあなたをこんなハンカチが売っているようなところに行かせてしまうなんて…無礼すぎますもの。」

「それなら心配ないよ。小さい頃、母の買い物の付き合いをよくさせられてたからそういう所慣れてるし。それに一人でいくとなれば辛いけど――――」

そう言ってはやとは何を考えたのか、あたしの肩をつかんだ

「彼、弓月くんも一緒に行くから、誰がどう見ても彼女へのプレゼントを友達と選びに来たとしか思わないでしょ。」

「「はぁっ？！」」

思わず智も叫んでしまったらしい。声が重なった。

「ぼ、僕は一緒に行くなんて約束してない！」

きょどるあたしの隣で、智は怒心頭だった

「このハンカチはイタリアのお祖母さまから頂いたものなの。そこらで売っているような安物のハンカチと同じにしてもらっては困るわ。ハンカチはお祖母さまからまた送っていただくようにお願いするから、あなたはこれ処分してくれるかしら？」

そう言って、レースのハンカチを投げ捨てて去っていった。

はやとはレースのハンカチを拾いながらつぶやいた

「…俺ああいう女ムリ。」

はやとごめんね…アレ女じゃないから。

てか…あいつの親戚がイタリアにいるなんて話聞いたことないし。

「はぁー」

あたしのため息と同時に、大講堂への新入生入場は始まった――――

［25］

近木高校の新入生が式場に入っていき、列はじわりじわりと動く。

大講堂が近づくにつれ、あたしの心臓もバクバク

ズボンのわきで握りしめた手にも汗がにじむ

「緊張してるの？」

後ろからはやとの声

「う、うん。緊張してるかな…こういうの苦手なんだよね。」

この容姿だと…人混みとか、目立つこととか、あまり多くの人と関わることが嫌いになる。

「へぇ…意外だな。ワイワイするの好きそうな顔してんのに。」

「…ワイワイするの好きそう顔ってどんな顔？」

「言葉のまんまの顔。まあ、せっかくそういう顔に生まれたんだから楽しまなきゃ損ってことだよ！ほらっ！」

そう背中を押されると、

もう別世界。

吹奏楽部が明るい曲を奏でてて、春の太陽が大きな窓から差し込んで眩しい

入口を入ってすぐ両脇に保護者席。その奥、ステージ前に新入生席がある。

そしてあたしたちを見守るように2階席、3階席に在校生。

壮大、としかいいようがない。

「新入生着席。」

その号令で木製の5人掛けの長イスに腰かける

式が滞りなく進められていく中、ハヤトが突然話し掛けてきた

「あいつ、学生の間で“ボー君”って呼ばれてるんだってさ。」

彼の視線を目で追ってみると、舞台脇でいかつい顔のおじいさんが大あくびをしていた

「ボー君ってあのおじいさん?…てかあのおじいさん誰?」

首を傾げるあたしに、ハヤトは大層驚いたらしい

「誰ってお前っ!慶智グループのトップだよ!」

慶智グループって言われても…

「慶智グループって何?」

あたしの傾げていた首が更に傾いたのを見て、隣の人は大きなため息をついた

「慶智グループの始まりは江戸時代。最初は小さな問屋だったって伝えられてる。まぁ、それから少しずつ成長して明治時代に創立した松ヶ丘をきっかけに学校経営も開始。それで25年前、ボー君が

会長になって……」

突然ハヤトが黙りこんだ

「はやと？」

問い掛けてもある一点を見て固まったままだ

「ねえ、はや……と…」

しばらく経ってからあたしも異変に気づいた

張り詰めた空気。

見られてる…。誰かに…。

誰かに見られてる。

恐る恐る視線を舞台上に移すと、ボー君が冷めた目であたしを見てた。

そしてあたしを見たまま、ゆっくり口を開く

「私は式典などの改まった感じが苦手なのでね、手短にしよう。はじめに、私は理事長の神宮寺（ジングウジ）紡太朗（ボウタロウ）だ。」

…ボ、ボー君っ！

「松ヶ丘に１２０名、櫻之葉に１２０名、近木に２４０名、計４８０名の生徒が新たに加わったこと大変嬉しく思うよ。３年間たてつづけ、新入生の大半が外部入学という悲しい結果になって少し残念ではあるのだがね…」

大半が…外部入学…？

思わず周りをキョロキョロと見回してしまった

…確かに初めて見る顔ばかりだ。

見覚えがあっても、本当に附属中学にいた人だと断言できない…名前も知らないような人。

でも3年たてつづけって…腐っても慶智大附属中学だ、みんな決して馬鹿じゃない。

どうして…

「あぁ、そうそう。私のかわいい孫娘も今年高1でね。孫娘のためだけにお祖父ちゃんとして入学式に行ってやりたいんだが、こういう立場だからいけなくてねぇ。っと仮にも入学式の式辞なのに申し訳ない。」

ボー君はさっきとは打って変わって、お祖父ちゃんの顔でにこやかに笑った

…意外にイケメンかも

「それでは最後に一言。青春は一度きりだ、思う存分楽しみなさい！」

「それでは松ヶ丘高校の新入生、在校生、以外は退場してください。」

司会者がそういうとぞろぞろと人が動く。

2階席3階席の在校生が下のフロアにおりてきて、グレーの制服が一面を覆ったとき

再び壇上にボー君がのぼった

舞台に上がったボー君は気味悪い笑みを浮かべてうつむいた

「…3年だ。ここまでくるのに3年かかった。残りあと2年だよ。」

その台詞に生徒たちは首を傾げる

「周りを見回してごらん。ここ3年間の入学した生徒はね、顔と身長ともに並以上。学力もある。家もそれなり。…最高とはいかなくとも、最善はつくした。私よりすぐりの男たちだ。」

そう言われても生徒は何が何だか…

そんな彼らを嘲笑うかのようなボー君の高笑いが講堂に響いた

「私の孫娘も慶智に入学してな。とても可愛い子だ。」

ボー君は左手で白いネクタイを緩めてワイシャツの第一ボタンを外す

「我が孫娘と婚約にまでこぎつけられたら、慶智グループの全てをくれてやるぞ！」

［26］

「なぁ、さっきどう思う？」

教室に戻り、学校生活について越坂部がせっせと話しているとき

だるそーーーに机につっぷしていたハヤトが聞いてきた

「どうって聞かれても…でもあの話を聞くとここのみんなお坊ちゃまなんだね。」

周りを見回すと確かにみんな育ちがよさそうだ

はやとも智と会話してるとき紳士っぽかったし…

「はやとの家は何してるの？」

「何かしてるわけじゃない。親父が企業の上の方にいるだけだよ。だから俺がどうってことはないし、家も金持ちなわけじゃないんだけどなー…」

「へぇー。」

そんなこと言いつつきっと大豪邸に住んでるんだろうな…

「お前は？」

「えっ！僕っ！？」

自分のことを聞かれると思ってなかったから思わず大声を出してしまった

目の前のはやとの顔が歪む。

恐る恐る振り向いてみると、

みんながあたしを見てた。

教壇の上の越坂部も呆れたように口を開く

「…弓月くん。放課後、残ってくださいね。」

「…はい。」

中学のときとは違う、聞きなれないチャイムが響いた…

みんなは嬉しそうにカバンを抱えて教室を飛び出す

…あたしにはそのチャイムが地獄行きの列車の発車ベルにしか聞こえなかった。

「んじゃ智、寮で会えたら寮で。会えなかったらまた学校でなっ！」

「うん…はやと、バイバイ。」

ハヤトも周りの生徒と同様にカバンをかかえて嬉しそうに教室を飛び出していった

目の前にひとりの男。

「…どうして弓月くんは僕の話を聞いてくれないんですか？」

いま…間違いなく地獄に向けて列車は走り出した。

「…絶対に聞かなきゃいけないなんてそんな決まりはないでしょ？」

なんてわがままなんだろう。と、自分でもそう思う。怒鳴られるのは百も承知だ。

でも閻魔大王はそのセリフに微笑んだ

「ハハッ！あの人と同じことを言うかっ！」

まだ生徒が残ってるのに…素がでてるよ、この人。

それに本人も気づいたのか、ワザとらしく大きな咳をして持っていた生徒名簿を抱えなおした

「ゆ、弓月くん。僕についてきてください。」

「はあ。」

ＨＲで配られたプリントをカバンの中にしまって、教室を出ようとしている彼の背中を追いかける

追いかけるべき背中は、頑張って追いかけても決して近づくことはなく、どちらかというと少しずつ小さくなっていった。

「…歩くの早過ぎだから。」

ふと立ち止まって顔を横にずらすと、西に傾いた太陽が照らす広大なグラウンドが目に入った

一面を青々とした芝生が覆い、陽にあたってきらきらと光る。

そしてそのずっと奥、朱いレンガを積み上げた壁に白い窓枠がよく映えた可愛い建物が桜の花に囲まれて建っている。

あれが…本来ならあたしが通うはずだった…場所。

「そんなにココが嫌？」

「…え？」

突然ついてこなくなったあたしを心配したのか、越坂部が廊下を戻ってきた

「……別に嫌じゃないですけど」

「そんな顔してさァー……嫌なら嫌って言わなきゃ損だぞ。」

そういってあたしの眉間を長い指でつつく

「逆も同じ。好きなら好きって言わなきゃ損だ、凄く後悔する。」

「先生…そういう経験あるんですか？」

「…なめてんの？こっちはお前より十数年長く生きてんだ、後悔だってお前の何倍もしてるよ。」

そう言って鮎川は再び歩き始めた。…ゆっくりゆっくり、あたしがついていける速さで。

今度は少しも小さくならない背中に問いかける

「先生がいままでで1番後悔してるのって何ですか？」

「1番の後悔か…好きな人に好きだと言えなかったことだろうな。諦めてから15年も経つのに今でもたまに好きだと思うんだ。」

「未練がましーっ！」

「ハハッそう言うなよ。」

その背中はとても寂しそうで

窓からオレンジ色の西日がさして、色素の薄い彼の髪が更に赤く見えた

「俺が中1の時、用事があって慶智大に行ったんだ。そしたら研究室にすげぇ美女がい『先生、そこまで聞いてないです』

正直にそう告げると、鮎川は眉間にシワをよせて振り返った

「いいから聞け！少しぐらい昔話に付き合え！」

…この人本当に教師？

少し疑いたくなる。何て自分勝手な男なんだ！

眉をひそめるあたしを一度睨んでから彼は何事もなかったかのように前を向き歩きだした

［27］

「才色兼備、まさにそんな人で一目惚れして、研究室に通いこんだ。話して話して7コ上の20歳だって分かって、それだけで嬉しいくらい好きだった。」

「…中1の分際で大学の2回生に恋って…」

「うるせぇ、黙ってろ。気持ちに歳なんて関係ねーんだよ。」

そういいながら今度はポケットに手を入れて何かを探し始める

「会えば会うほど相手の事が分かっていった…だけどそれと同時に知りたくない事も分かっていった。それでも知ってしまった悲しさより知れた嬉しさのほうが勝って…彼女にどんどんのめり込んで行ったんだ。」

「で？それから先生はどうしたんです？」

いつの間に着いてたんだろう？

目の前で越坂部がポケットから取り出した鍵を鍵穴に差し込んでいた…

鍵が開く音と同時に越坂部が口を開く

「5ヶ月くらい通って諦めた。」

「えっ…どうして？」

クリーム色の引き戸がカラカラと音をたてて開く

「……その人の腹に…子供がいた。」

「えっ…そんな…」

「5ヶ月も気づかなかったなんて俺ほんと馬鹿だよなー、今でも思うわ。でも…あんときは憎かったけど、今じゃ普通に思えるんだ“あのお腹にいた子は今どうしてるだろう？元気だろうか？”って。」

さっきまでとは打って変わって今度は優しそうに笑った

そして部屋に入ると、手に持っていた名簿やペンケースをごちゃごちゃと物がつまれた机の上に置く

「先生は、その女の人とお子さんに会ってないんですか？」

「今でもたまに会ってる。綺麗だった先輩は３５歳のおばちゃんだし、子供は１５歳のかわいらしい嬢ちゃんになってるよ…俺ももう２８か、歳とるのって早ぇな。」

「先生って２８歳なの？」

「何だ？俺が２８じゃ不服か？それより何飲む？お湯沸かさなきゃいけないから時間かかっけどコーヒーか紅茶ならあるぞー。あっそういえば伊右衛門と…リンゴジュースもこのへんに。」

ごそごそと机のわきのダンボールからホコリまみれのペットボトルと紙パックを取り出す

「…僕、コーヒーがいいです。」

…あのホコリまみれのペットボトルを見て、人間ならば飲みたいと思うバカはいないと思う。

「コーヒーね、了解。」

そういって越坂部は流しをがちゃがちゃとあさる

「これは…ダメ。これもダメ。あぁーこれは…使えそうかなァ？」

「先生！ちょっと待って！！」

「何？」

…何じゃなくて…普通に考えて…そんな茶渋がっちりの黄ばんだマグカップ、それも洗いもしないで長時間放置したカビのはえた物を客人に出します?！

とは言えないし…

「僕やりますから。先生は座っててください。」

あたしは自分でやったほうがいいという結論に至った。

［28］

寒いけど汚れるのも嫌なので制服の上着を脱いで、部屋の隅におかれたソファーの上に畳んで置きワイシャツの袖を捲くる。

シンクを覗くといつのものかも分からない、汚い物体が跋扈していた…

「…コップ洗うくらい毎日してくださいよ。ここが何室だか知らないですけど他の先生こないんですか？」

「第三社会科準備室。俺以外の教員は全く来ない。」

「どうして？」

「ここは政経専門の準備室なんだ。社会の教員は十数名いるけど、どいつも政経と日本史とか政経以外の教科も教えてるからそっちの準備室にいるんだよ。それにココは校舎の一番端で教室から遠いし、木に遮られて日当たりも悪いからな。」

「へぇー。」

…この蛇口はお湯も出ないのか…。

赤い蛇口をひねってるのに一向に冷たい水しか出ず、仕方なく冷たい水に手を伸ばす

「っ…」

まだ4月の頭で、少し冷える。指先がじんじんと痛んだ。

カチャカチャと食器があたる音だけが静かな部屋に響く。ふと先生が口を開いた

「なぁ、女だってバレたらどうしようとか考えなかったわけ？」

「…別に昔から男みたいだって言われてたし、バレない自信あったし…」

越坂部が大きなため息をつく

「バレない自信ってお前…そんなモヤシみたいな体で何言ってんだか。」

「モヤシッ?!失礼なっ僕けっこう力強いんですよ!無駄に部活やってたわけじゃないですからね!!」

「ほほーう」

このとき後ろの気配に気づいてればよかったのに。あたしはとんだ阿呆だ。

「っ?!」

後ろから突然腕をつかまれた、それも凄い力で。

「力、強いんだろ?振りほどいてみろよ。」

つかまれた腕はびくともしない

「後ろからなんて卑怯!」

「いつなんどき何処から誰が攻めてくるか分からないんだ。後ろからかもしれない、寮で寝込みを狙われるかもしれない…」

「離してよっ！！」

そう叫ぶとようやく手を離した

握られていたところが痛む

「最っ低ー。何でこんなことするわけ？！」

「お前の親父に頼まれたからだ。これで分かっただろう？お前は女なんだ、少しは自覚しろ。」

…どうして、どうしてあたしが…そんなこと言われなきゃいけないの…

泣くまいと、そう決めたのに…

「…っ…もういや…先生なんて大嫌い！！」

悔しさなのか、自分でも何なのか分からない。

咄嗟に部屋から飛び出していた

「弓月ッ！！」

そう叫ぶ越坂部の声が背中越しに聞こえた――――

［29］

慶が飛び出していった部屋にひとり置いていかれた越坂部はただぎゅっと唇を噛む。

学ラン越しでさえ分かった細い体のラインは、ワイシャツ一枚だとさらに生々しくて、彼女が女であることを主張しているようなものだ。

この手で握った腕もか細くて、少し力を入れただけで折れてしまいそうだった…

その脆そうな体も、顔を近づけた彼女の首から漂う甘い香りも、、、男子校の飢えた狼たちの恰好のエサししか思えない。

…俺が“お前は女なんだと”分からせるもっと違う教え方が出来ればよかったのに

「あーっ！くそっ！！何やってんだよ俺ーっ！」

その様子を影から見ていた人がニヤリと笑った

「デジャビュかな？なんか俺こんなシーン過去に見たことがあるような気がするー。」

越坂部はその声の主をみるなり内線を手に取る

「……不法侵入者発見。警備に連絡。」

「うわっ待て京！！冗談だよ！冗談！！」

「で、なんの用なんですか？悠平先輩、いや今は弓月准教授でしたっけ？」

「恥ずかしいからいちいち確認すんなボケ。それよりお前！万里子にそっくりだからって慶ちゃんに手ぇ出してねえだろうな？」

「心配しなくても出してませんよ。そんなに心配でした？」

そういって越坂部は慶が洗っていった綺麗なマグカップにコーヒーを注いで、慶の実父の前に出した。

「実の子だ、心配しないわけないだろう。…それに怖いんだ、慶ちゃんは鈴と正史の子として育って2人に似て心はとても優しく穏やかに育ってるのに…血は争えない、万里子にどんどん似ていく。智もそう、俺たちの子として育ててるのに…容姿ばかりは鈴と正史にそっくりで……いつか親が違うってバレるんじゃないかって。」

「…俺が“お前の母親は万里子さんだ”とでも言うと思ったんですか？」

「俺に対する腹いせ…とかで。」

越坂部はため息をついて持っていたマグカップの中を睨む。そこには慶が強く擦ってもとれなかった茶渋があった。

「15年も昔のことなんて…忘れましたよ。」

本当は忘れてなんてない。この茶渋みたいに擦っても擦っても取れないくらい俺の記憶に染み付いてる。

「中学生ながらに万里子さんのことは本気で想ってました…でもお腹にはあんたとの子供がいたし、」

でも今日、気づいた。染み付いた茶渋はどんなに擦ったって取れはしない。

一生俺の心に付きまとう。でも…その茶渋を落とそうと頑張ってくれる人がどこかにいる。

「弓月准教授、弓月って…あ、慶ちゃんでしたっけ。本当に万里子さんに似てますよねぇー。」

「京っお前まさか！？ダメだ！！絶対に慶ちゃんはやらん！！慶ちゃんはやらんからなーっ！！」

「冗談ですよ、冗談。２８にもなって高校１年生を相手にするわけないでしょう……てか警備がくるから叫ばないでください。それより大学戻らなくていいんですか？」

「あ…レポート忘れてた。今日中に読んでおいて欲しいって山田君から頼まれてたのに…。」

「はいはい、山田君のために早く帰りましょうね、さようなら。」

［30］

弓月准教授が帰った後の準備室は鳥の鳴き声が響くほど静かになった。

イスに座って窓から青々とした葉を見つめる越坂部の顔は渋い

「…冗談とかいったけど…俺ってロリコン趣味あったっけ？」

頭に浮かぶのは、弓月智と名を偽り男子校の松ヶ丘入学してきた“女の子”の顔ばかり。

越坂部は窓から視線をそらしデスクの引き出しをおもむろに開けて大きな封筒を取り出す

大きな封筒の中には書類が3枚、春休みの間に依頼していた彼女についての調査結果だ。

クリップで留まっている書類の一番上に、盗撮したであろうセーラー服姿の女の子が映った写真が挟まっている。

今は無い、少し長いサラリとした綺麗な髪は風になびいて、中学生らしい膝丈のスカートからは細くて白い足が出ている。

「コレは男の女装というより……大人の女のコスプレだな。」

あの子に中学のセーラー服は子供っぽ過ぎただけだ。

道端で色々彼女に言っていた奴は彼女の容姿を羨ましがって皮肉っただけだろう。

自分の魅力に気づかずにそれを真に受けてしまう彼女も彼女だけど…まあその無垢さが可愛いんだろうな。

写真をめくると文字がでてきた。

「本名、“一ノ宮（いちのみや）慶（けい）”。性別、女。…ってそれくらい知ってるから。」

戸籍において“一ノ宮　慶”は一ノ宮夫妻の実子として登録されているが、

一ノ宮慶が生まれた産婦人科の元看護師曰く、一ノ宮夫婦の間に生

まれた子供（男児：現　弓月智）と弓月夫婦の間に生まれた子供（女児：現　一ノ宮慶）を入れ替えたという。

看護師の証言から整理すると以下のようになる。

実父『弓月　悠平』慶智大学准教授。浮ついた話が多い。

実母『弓月　万里子』慶智大学2回生で出産。在学中、ミス慶智に選ばれる。卒業後は神宮寺紡太朗率いる慶智グループの本社に勤務。

養父『一ノ宮　正史』実父と同じく慶智大学で准教授を務める。

養母『一ノ宮　鈴』実母と同じく慶智大学2回生の時、実子“弓月智”を出産。卒業後は専業主婦。

この4名は慶智大学附属慶智第三小学校からの親交があると思われる。

しかし、何等かの手によって“弓月万里子”と“一ノ宮正史”の経歴が詐称されている確立があるため定かではない。

以上の件においては、相当手が込まれているらしく、これ以上追求は不可能であるとみる。

「…経歴詐称ねえ…物騒だな」

鼻で笑いながら俺は2枚目を読み始めた――――

【31】

「信じられない！なんなのアレっ！！いらいらするーっ！！」

零れる悔し涙を隠すように下を向いて足早に越坂部から遠ざかる

その時だ

……―ドンッ―：

そんな鈍い音と共に体全身に痛みが走る。

「大丈夫ですか？！ごめんなさい、俺が前見てなかったからっ。」

自分の頭上で誰かがそう言っている。お陰で、誰かとぶつかって自分が倒れているんだと気づくことができた

「大丈夫です。…僕も前見てなかったんで、こっちこそすみませんでした。」

女だとバレないようにするために人との接触は出来る限り避けたい。
慌てて体を起こそうとする肘に激痛が走った

「っ！」

打ち所か悪かったっぽい。

その微かな声を聞いて、ぶつかった相手はあたしの肘を見ようとしゃがみこむ

「大丈夫とか言って痛いんでしょう？大丈夫じゃないじゃないですか！」

「…え？」

目の前に見える顔に驚いたのは、あたしだけじゃないらしい。

ぶつかった相手も廊下にしゃがみこんだまま目を見開いて呟いた

「け…けい？」

そしてすぐ次の言葉

「どうして…ここに？」

「話せば長くなりますけど？」

久しぶりの桐生先輩にそう笑いかけると、先輩は急に真面目な顔になって学ランの前をとめるフックを外し始める。

「えっ？先輩なにやってるんですか？」

「…上は？」

「上？」

思わず天井を見上げてしまったあたしはバカと呼ばれるに値するだろう。思わず自分でも苦笑してしまった。

でも先輩はいたって真顔で、最後のフックに手をかける

「制服の上はどうしたの？」

「…あ。」

上着を脱いであの部屋のソファーに置いた光景を思い出す。

「…第三社会科準備室に置いてちゃいました。」

あっさりそう言ってのけるあたしに先輩はため息をついて自分が脱いだ学ランをあたしの肩にかけた。

そしてあたしの頬を濡らしていた涙を大きな手で拭う

「そこで嫌なことがあったとしても……ワイシャツ一枚じゃダメだ
…風邪ひくよ。俺が一緒に行くから取りにいこう」

手を覆うほど大きな学ランからは大好きな香りがして、片手を包む
大きな手からは大好きな温もりがする。

なんだか桐生先輩に抱き締められてる感じがして嬉しいな

越坂部先生とは違ってあたしの歩く早さにあわせて歩いてくれる優
しさも嬉しい。

「へへっ」

思わず笑ってしまう

「どうした？」

「高校生になっても先輩と一緒の学校に入れるなんて嬉しくて」

「まさかそのために松ヶ丘にしたの？！」

「それは違いますよっ。あの…弓月智って覚えてますか？」

智の名前を出すと先輩はいつも不機嫌になる。だから極力名前をあげていなかったんだけど…

「…覚えてるよ。幼馴染みの男の子でしょう？」

…ほらやっぱり機嫌が悪くなった。

「その弓月智の両親とうちの両親が仲が良いんですけど、面白いから智とあたしを逆転させちゃおーってなったらしくて…」

「…それで…今の名前が一ノ宮慶じゃなくて弓月智ってこと？」

「はい。」

「じゃあもう慶ちゃんじゃないんだね、智くんって呼んだほうが良い？」

そう言った先輩の声は冷たかった

［３２］（前書き）

はじめまして、橋です。
読者のみなさまいつもありがとうございます！

初めての前書きですが、慶や桐生先輩が着ている松ヶ丘高校の制服について書きます。

私が通っている高校は地方の古くからある公立高校なんで、典型的な学ランで…金ボタンです。

多くの人は学ランと言われるとそっちのほうを思い浮かべると思うんですが

今作品では、金ボタンではない学ランをイメージしてます（分かりにくくてすみません；）

この間、駅で学ランだけどボタンがない……なんと言えばいいのか…前はチャックで閉めているんだろうか？的な学ランを着た背の高い好青年を発見しまして（笑

その方が着ていた学ランがモデルになってます。

そして慶他松ヶ丘生の足元はローファーです！

たまにスニーカーの人いますけどもったいないです。

学ランにはローファーあわせてください！

以上、（個人的嗜好は入りましたが）制服についての説明です。

本編へどうぞ←

［32］

「嘘つきっ！先輩の嘘つき！“どんな姿でも笑って好きって言ってくださいね”って約束したのに！！」

「えっ！ちょっ慶っ泣くなよ！！」

つないでいた手を離して、目を拭う

「泣いてない！」

「嘘つきはどっちだ！普通に泣いてるだろうが！」

さっきとは打って変わって焦ったようにそう言ってあたしを抱き締める

「泣かないでくれよ…俺、慶の涙には弱いんだから…」

「だから泣いてないって言ってるっ」

「はいはい。そうでした。慶ちゃんは泣いてないです。だからほら、笑って？」

顔を上げて笑うと、先輩は落ち着いたように息を吐いてあたしの手を握って再び歩き出した

「大丈夫？」

「え？！うん！越坂部先生なんて全然平気だよ！」

「そうじゃなくて…腕。俺とぶつかって倒れたときに痛めてたでしょ？」

あぁ…腕ねー。すっかり痛みもひいて、痛かったことさえ忘れていた

「全然大丈夫！」

慶の明るい返事を聞いて安心したように微笑んでから、桐生は急に真顔になる

「…慶、越坂部先生と何かあったの？」

「いや…別に…何も。」

「そう…別になにもないならいいんだけど。」

「うん。」

それから気まずい沈黙が続いて、さっき飛び出したクリーム色の扉の前に着いた…

コンコンと先輩が扉をノックすると中から、あの声が聞こえた

「入れ」

…あたしが来るのを見計らっていたのか、教師じゃない性格の時の声だ。

先輩はあたしに背後に回って、あたしの顔の脇に長い腕を出して扉を開けた

開かれた扉の先を見て、越坂部は目を見開き一点を凝視する

「お久しぶりです、越坂部先生。」

「…桐生。」

越坂部の手に握られていたプリントの束がバサバサと床に落ちた。

「弓月、お前は何で入学早々上級生と絡んでるんだ」

落ちたプリントの上を跨いで越坂部があたしと桐生先輩を離そうと近寄ってくる

それを制するように先輩が口を開いた

「教師が生徒間の交友に口を出す権利はないはずですけど？」

その口調は挑戦的で…あたしが初めて聞く先輩の声色だった…

［３３］

「では…教師が関われる範囲で粛正しよう。新入生はまだ部活等クラブ活動への参加は許可されていない。そして帰宅部の生徒は補習等特別なことがない限り、ＳＨＲ終了後１５分以内に帰寮することが義務付けられている。故に、弓月、お前は本来ならもう寮にいなければいけないはずだ。」

“寮に早く行け”越坂部の目がそういっている。

この時間まで残したのは誰だ？あんたじゃないのか？

そう言いたくなるのをぐっと我慢して頷いた。

越坂部は満足そうに笑ってソファーの上に置いてあった制服の上を押し付けてくる

「分かればよろしい。とっとと帰れ。」

う、うざっ！！

「言われなくても帰りますっ。」

乱雑に骨ばった手に握られている制服を奪い取って、そのまま先輩

の腕を掴んで引っ張る

「先輩、一緒に帰りましょう？」

「あ、あぁ。」

突然腕を掴まれたのに驚いたのか、少し動揺しながらも桐生は頷いた。

社会科準備室を去ろうと足を踏み出したあたしたちに向かって越坂部は叫ぶ

「将！お前は残れっ！！」

それも名指しで。

名前を呼ばれて先輩は、廊下に足が張り付いてしまったようにその場に固まってしまった

「先輩、気にしないで行きましょう？」

西日が凄くて、顔は影になってよく分からない。

先輩はただ一言、あたしに告げた

「…先帰ってて。」

え？先輩？

そう呼び止めようと思ったときにはもうクリーム色の扉がガラガラと廊下に重い音を響かせて閉まった

さっきまで大切な何かを掴んでいた右手が、掴むものもなく虚しく落ちた

慶がとぼとぼと寮に向かっている時、第三社会科準備室には男が２人。

「うざいから学校では“将”って呼ばないでくれる？」

「別にいいだろー、お前は将なんだから。」

越坂部はワザとずるずると汚い音を出してコーヒーをすする

「よくない。あんたと仲良く見られたくない。」

「酷いなァー。それがオニイチャンに言う台詞？」

［34］

「今更オニイチャン面やめてもらえます？」

2人とも“オニイチャン”というフレーズがとても片言。

それはそうだ、越坂部京が桐生将の兄だった期間はとても短い。たった3年。

将が生まれて3年で、母は京だけを連れて桐生家を出た。

たった三つの子供を残して母親が家を飛び出したのにはもちろん訳がある。

「俺の母親とあんたの母親は違うだろ。」

オトウトのそんな台詞を聞きながらオニイチャンは煙草の先に火をつける

「そうだな。」

体に悪そうな白い煙と共にぼそりと言葉が漏れた

俺の母親は好きでもない男の所に嫁いで、子供を産んだ。

その男には結婚する前から女がいて、女はそれから子供を産む。

愛人と呼ばれる存在に産ませた子供を男は引き取るが、

男の妻は血の繋がりのない子供の母親になりきれず、実の子供だけを連れて家を出た。

「政略結婚なんてすんなってことだ。」

「…自分はしないの？今やばいって聞いたよ、越坂部建設。」

「政略結婚なんてしないさ。…“今”じゃない、元々やばかったんだ。資金繰りが上手くいかなくて倒産しそうになってたときに、若い娘を桐生に嫁がせてどうにか存続させてただけ。……もう潮時だろ。」

「潮時って…会社つがないの？社員はどうすんの？あんたそれでいいの？！」

じわじわと少しずつ指に近づいてくる煙草の火を避けるように灰皿に煙草を預ける

「将、お前は、俺が何のために教職とったと思ってる？」

「……知らない。」

「“家から出るため”だ。出来れば越坂部の名前も捨ててしまいたいくらいに…あの家が嫌いなんだよ、俺は。」

傍から見れば白い壁の明るい家、でも中は驚くほどに暗くて重い家。

松ヶ丘に採用されてようやく解放された。

はずなのに、毎日かかってくる催促の電話。

ほら、また今日も…

スーツのポケットの中で唸る携帯電話。

ディスプレイを見ずとも誰からか分かる。

越坂部建設代表取締役である祖父からだ。

「桐生、呼び止めて悪かった。もう帰って良いぞ。」

「あんたのことだからもう“弓月智”の正体知ってんだろ？…二度と慶と俺の邪魔すんなよ。」

そう言って俺を睨んだ彼の顔は初めて見るものだった

「…まさか…お前本気なの？」

その問いかけに桐生は答えずに俯く

俺はさらに畳み掛けるように言った

「お前…美麗（ミレイ）ちゃんどうすんだよ…」

すると苦しそうに声を絞りだす

「…あんただろ『政略結婚なんてするもんじゃない』って言ったのは」

「そりゃ言ったけど……いくら桐生がデカいって言っても葛城相手じゃ高が知れる。葛城を敵にまわせば間違いなく桐生は潰される。」

…それに…慶は、たかが大学教授の娘

「将、いいか良く聞け。…一ノ宮慶は諦めろ。」

“お前の得になることは何一つない”

「…無理、だよ。……もう戻れない。好きになりすぎた。」

そうとだけ告げて、将は廊下に飛び出していった…儚くて、今にも消えてしまいそうなほど切ない顔で…

『もう戻れない。好きになりすぎた。』

両親が離婚する前に言い争って、父親がそう言っていた。

「馬鹿だよ…ほんと馬鹿。お前も、父さんも…ほんと馬鹿。」

［35］第3章　学生寮

「飛び出してきたはいいけど…」

さてどうしたものか…

この広い学校の敷地のなかぽつんと一人。

慶智大学附属松ヶ丘高等学校と彫られた石の大きな門を出たまま足が動かなかった。

自分が方向音痴なのは知っている。けれど、方向音痴とかそれ以前に…知らない土地でどう動けと？

目の前に広がるのはただまっすぐ並ぶ桜並木。それを挟むように赤レンガの建物と近代的な建物の塊があった。

赤レンガが櫻乃葉だということは分かる。

赤レンガと対照的な近代的建物は…何？

あれが寮？いやいやありえない。

引き返して桐生先輩に助けを求めるか？…ダメ、もう校舎には戻れない。

「…やばい。まじやばいよ。」

でもこのままココに居るわけにはいかない。

やっぱり…校舎に戻って先輩を探そう。

そう思ってくるりと振り向くと同時に鼻先に痛みが走る

「いっ！！」

「『い』じゃない。また君か、弓月。」

この声！！

朝、あたしを助けてくれた

「ブチメガネ先輩！？」

「…ブチメガネ先輩じゃない。五十嵐（いがらし）だ。」

「五十嵐先輩？」

「そうだ、そう呼べ。…お前また出遅れたのか？」

…そりゃあ朝は確かに出遅れて、あなたに助けてもらいましたけど

「今回は違いますっ！担任に呼ばれて…で、解放されたんですけど…寮がどこか分からなくて…」

ふと、五十嵐先輩を見ると面白そうに笑ってた

「なんで笑ってるんですか？！」

「いや何でもない。まあ気をつけろよ。」

「き、気をつけろって何にですか？」

寮だろ？ついて来い。そう言って五十嵐は桜並木を歩きだした。

そして何歩か歩いて立ち止まり顔だけこちらに向けてにやりと笑う

「ここは外から見ればお坊ちゃま学校だろうが外見なんて当てにならない。…特に天然は食いやすいからな。」

ただそうとだけ言って再び前を向いて歩きだす。あたしはその広い背中を黙って追いかけた。

寮は思ったより…全然近かった。てか最初にありえないと思った近代的建物…。

松ヶ丘の校門を出てまっすぐ伸びていた桜並木の中腹に“慶智大学附属高等学校学生寮”と書かれた札のかかった門があり

門の脇には何やら小洒落た建物が建っていて、門の中には背の高い建物が所狭しと並んでる。

五十嵐が顎で門の脇の建物を指してから言う

「これは寮と大門の警備。」

「大門？」

「あれだよ、あれ。」

長い指の先を目で追うと、桜並木を松ヶ丘とは逆の方向に行った所に大きな大きな門が見えた。

朝、あたしとお母さんと智と智ママと一緒にくぐった門。

あたしが門を見つけたのを確認してから五十嵐が続けて言う

「松ヶ丘、櫻乃葉、近木。それぞれ校門はあるけど、それをまとめて一つの慶智大学附属高等学校として見た時の門だ。」

「…寮も学校の敷地内ってことですか？」

「そう。俺らはここから出られない、ここに閉じ込められてた、かごの鳥。」

「な、なんなんですかそれ…嘘でしょう？」

「嘘じゃない。見えてるだろう？あの大門が。」

そう言われて五十嵐の顔から大門に再び視線を戻す。

…見える、見えるけど…ただの門。閉まっていて、鍵がしてあって、、、

「ただの門ですよ。」

そう呟くと、五十嵐は笑った

「まだ入学初日だもんな…分かんないか。」

「あの門に何かあるんですか？」

「…どうして警備が寮の近くにあるか…普通なら門の隣にあるはずだろ？」

確かに。そう思ってただ頷く。

「門の高さは3．5メートル、学校の敷地を囲む塀は3メートル。そして警備会社の監視付き。」

「あ、分かりました！誰も入れないからですね？それでももし変な人が寮に来ちゃったら、咄嗟に捕まえられるように！」

「んーまあ学校側はそう思って設計したんだろうけどな…。」

五十嵐は眉を顰めて少し離れたところに聳え立つ大門を睨む

「外から見れば頑丈警備の金持ち学校。だがしばらく中に居る身じゃ…その高い塀も警備も、うざったいだけ。まるで刑務所に拘束されてる気分になる。」

「そ、そんな…刑務所だなんて…冗談」

「冗談じゃない。あの門は週5日は閉ざされていて開くことはない

し、週末の2日間は開くといっても…許可証がない人間は出れない。」

「…きょかしょう？」

「外出許可証。定期試験ごとに有効期限つきで発行される。品行が悪い奴、1つでも赤点をとった奴、そいつらには許可証の発行は確実にない。」

品行は良しとして、赤点だめって…あたし確実に赤点とっちゃう人なんですけど！！

「…まぎれて出るとか」

「寮監が一人一人チェックする。」

「そ、そんなーっ」

思わず肩をがっくりと落としてしまう

その様子をみて五十嵐が笑った

「さっそく囚人気分になったか」

あんたのせいだ！あんたの！

「わざわざ寮までありがとうございました！！」

ぷい、そんな音が似合うような顔であたしはそっぽを向いて、五十

嵐を置いて門の中に一人で入る

ふと背後で五十嵐が声をあげた

「弓月、そこの段差気をつけろよ」

格好つけてローファーをカツカツ鳴らして歩いているのにそんな段差ごときで転ぶはずないでしょ！

「言われなくても！だいいち、段差なんかに躓いて転ぶようなバカじゃありませんから！」

と粋がって言った途端、段差に躓いて無様に転んだ。

と同時に後ろから思いっきり吹き出して腹を抱えて笑う声が聞こえる。

「お前バカ決定！」

黒縁のメガネがずり落ちそうなほどに彼は笑う。

『段差に躓いて転ぶようなバカじゃありませんから！』とか言った手前なにも言い返せない…

立ち上がってパンパンと制服を叩く姿を見て五十嵐はさらに笑う

「ほんとバカだなぁー」

「う、うるさい！！」

少し遠くに飛んだカバンをつかんで足早にその場を離れ、足早に奥の方に進む

「弓月！」

また背後で叫ばれた。

「もうなんなんですかっ？！」

「そっち女子寮。」

「…へ？」

［36］

植木はきちんと切られてて、花壇の花は季節にあったものが植えられていて、もちろん雑草なんてない。

門から一番遠いところが目的地だった。

どこかのホテル…とまではいかないけど、ちょっとしたマンションくらいのレベル。

手前に“松ヶ丘学生寮”と横に彫られた黒い石が置いてある。

くもの巣もなく、てかてか光っているその姿はまるで

「……墓石のようだ。」

「は？墓石？」

あたしの口から思わず出てしまった言葉を聞いて五十嵐は怪訝そうな顔をする。

「いえっ！何でもないです！」

「……なんでもならいちいち口に出すなバカ。」

五十嵐は眉を顰めたままアプローチを進んでいった

少し先に寮の玄関がある。

ガラス張りでオレンジのライトが大理石の床に反射して煌く…さすがにあたしでもこれは墓石とは思わない。

五十嵐がドアに近づくとドアが静かに且つ速やかに開いた。

おおー…自動ドアなのか！

お金に不自由したことはないけれど、決してお金持ちなわけじゃなかったから、

こんな些細なことに驚いてしまう。

思わず立ち止まってしまったあたしを五十嵐は不思議がる

「何してんだ、バカ弓月」

…かくかくしかじか五十嵐先輩からは“バカ弓月”という名前で定着。

「黙れブチメガネ野郎」

バレないように小声で悪態ついて、あたしは少し先にいる五十嵐に駆け寄った

「お前何組だ」

「Ａです。」

質問に素直に答えると、五十嵐は男子寮の入り口に張り出されていた紙の一部を指差して言う

「１年Ａ組弓月智……２９４０室だな。」

「…２９４０室？」

「２号館９階４号室０型、略して２９４０室。」

そしてそのまま少し奥に進んで、上に太字で“２年生”と書かれた紙の場所で止まり、呆然と立ち尽くす

「……。」

「先輩？どうしたんですか？」

「……最悪な部屋になってしまった。」

最悪な部屋？

彼がずっと睨みつけている紙には黒い文字が羅列してあり、その一部に

“２年Ａ組　五十嵐　暦　　２９３０室”

と書いてあった

「２９３０室…じゃ、じゃあ僕の隣の部屋ですよね？何が最悪なんですか？」

「……お前らは若いからまだ平気だ、が…俺は死んでしまう。」

「え？え？死んでしまうって、えっ？」

そんなに最悪なことが起きるの？！てか若いとか１歳しか変わらないよね

びくびくとおびえ始めたあたしを横目に五十嵐は学生鞄を担ぎなおしてさらに奥へと進む

あたしは慌ててその背中を追いかけた。

幅は１０メートル程で、床は相変わらず大理石が続いていて壁という壁はなく前面ガラス張り。

ガラスの向こうには「学校かよ！」と思わずつっこみたくなるような整えられた庭が広がっていた

ふと前を歩いていた五十嵐が立ち止まる。そこは十字に道が分かれていた。

「俺たちが歩いてきたのが玄関に繋がる正面通路、左に曲がると１号館、まっすぐ進むと２号館、右に曲がると３号館。」

ガラス張りの通路から見えるその大きな建物、３本それぞれが睨みあうように立っている。

「絶対に間違えるなよ。」

「え？」

「今日配られただろう…２号館の証、赤い腕章。」

そういえば…と思って制服の左腕につけた今日配られた腕章を見る

「それは羨望の色であると同時に憎まれの色、Ａ組の証。２号館の寮生である証。」

「…憎まれの色？」

［37］

五十嵐が手を伸ばしてそっとあたしの腕についた腕章の金色の刺繍を指でなぞった

濃い赤に金色、どこか高貴な感じがするよくあった色合い。

「2号館はA組の生徒が入る所。そしてA組は成績優秀、家柄も申し分なしの…奴らが集まった松ヶ丘のトップなんだよ。だからB、C組の奴らは劣等感を感じずにはいられない。」

「で、でもっ！！」

「…でもも何もない。昔からここはそういう決まりなんだよ。俺らはまっすぐ進むことしかできない。」

そう言って、五十嵐は脇に見向きもせずに脇に見向きもせず歩みを進めた…

…この人は…自信を持ってるんだ。

……赤い腕章を自分がしていることに。。。

「先輩は…赤い腕章をしていることに…誇りを持っているんですね。」

その質問に少し悩んでから、先輩はゆっくり口を開く

「…どうだろうな。…まあ少なからず…誇りを持っているかもしれない。…そういうお前はどうなんだ？」

「ぼ、僕は…」

そもそもあたしの実力でここにいるわけじゃない。この腕章は智のものであって…智を演じているあたしのものじゃない。。

というより智の成績優秀は分かるけど…家柄が良いって…智もうちも家柄良い？

悪くはないかもしれないけど、決してよくもないはず。

また立ち止まっていたあたしを心配して五十嵐が振り向く

「おい、バカ弓月、早く来いおいてくぞ」

「あ、はい！」

慌てて駆けていくと、五十嵐はクスっと笑う

「お前は犬みたいだな。」

「犬っ？！犬だなんて心外です！」

「まあそう怒るな、俺なりの褒め言葉だ。」

ガラス張りの通路がぱっと開けたとおもったらそこは異世界だった。

…いや、ちょっと異世界は大げさすぎたかも。

でもさっきまでちょっと良い感じのマンションレベルだったのに…

ここでちょっと良い感じのホテルレベルに昇格したのは間違いない。

「せ、先輩…ここは？」

「ここはって……聞かずとも分かれ。2号館のロビーだ。」

……聞かずとも分かれって……これが学生寮とか…一般庶民には分かりません。

今立っている所から一段低くなった所の中央に何故か噴水があって
…真っ白のクッションとカバーが眩しいソファーがどーーーんって…

「……学生寮の粋を超えてると思います。」

「どこら辺が？」

「…床の大理石とか、噴水とか、でっかいソファーとか、あのシャンデリアとか、、、って言ってたらきりがないです」

高い天井からぶら下がっているシャンデリアをまじまじと見つめていると、突然誰かに肩を叩かれた

「もし、弓月智様でいらっしゃいますか？」

「え？！あ、はい！弓月です。」

振り向いた先には、スーツの良く似合う長身の男の人が立っていた。

その人はあたしの返事を聞いて、ニコっと笑う

「ようこそ松ヶ丘学生寮へ。」

そしてそのままあたしの肩に手を置いてさらに奥へと進むように促す

「あ、あのすみませんっ」

「はい、何でございましょう」

［38］

「…その手、離してもらえませんか？」

肩に乗る手をまじまじと見つめると、「あぁ、申し訳ございません」とすぐに離してくれた。

そして離した手をそのままロビーの奥に向ける

「弓月様は9階ですのでエレベーターをお使いになってください。お荷物はもう部屋に運んでありますので。」

たしかに階段で9階まで上るのは骨が折れる。エレベーターがあるのは当たり前だろう…

「あ、ありがとうございます。」

少し会釈して素直に手が向けられたロビーの奥に向かう

先を歩くあたしの後ろを長身の2人が追いかける形でとぼとぼと進む。

五十嵐先輩とこのスーツのおじさんは仲が良いのか…仲良さげに話しているのに耳を傾けた。

「五十嵐様は今年度も上層階でしたね」

「あぁ。最悪だ。」

「そうおっしゃらないで。文化部の五十嵐様には良い運動になりますよ」

「分かってないな山武(やまたけ)。俺は運動が嫌いだから文化部なんだ。」

どうもスーツのおじさんは山武という名前らしい

「…そのお歳でそのようなことを」

「運動が好きか嫌いかに年齢は関係ないだろ。」

「…まあそうですけど……」

山武さんの顔は見えないけど…分かる。絶対厭きれてる。

「五十嵐、生徒はもう大分帰ってきてるか？」

「ええ。ほとんどの方が戻られてますよ。」

「なら今日は上がれるな。」

心なしか五十嵐の声が弾む

ロビーの奥に、ひっそりと一枚の扉があった。

扉の右脇に三角の形をしたボタンがある。

「ほら弓月、早く押せ。」

五十嵐にそう促されて、三角のボタンを指で軽く押すと、三角がオレンジ色に光った。

そう…エレベーター。

扉の上を見ると、５の数字が見える。

５階なら

「５階なら待たずとも直ぐに来るな。」

「っ？！」

「…なんだよ」

「い、いえ…」

同じこと考えてましたなんて言えるわけない。

「…何でもないです。」

「なんでもないなら喋るな。」

「…すみません。」

…どれくらい時間が経っただろう…3分くらい？

…5階でしょ？ならもう来てもいいのに…

「遅いですね。」

思わずポツリと呟くと、その一言が五十嵐の何かを刺激してしまったのか

「ああ！遅い！遅すぎる！！」

苛立ったこえでそう叫ぶと、鞄を肩に担いで突然駆け出した

「えっ！？ちょっ！！先輩！！」

慌てて追いかけようとしたあたしの肩を山武さんが掴んで制した。

「弓月様は初めてですから、それに時間が決まっていないので急ぐ必要もありません。ゆっくり行きましょう。」

「？」

そんなこと言われても何がなんだか…初めてとかゆっくり…さっぱり。

っと思っていられたのも最初だけだった。

「ハァッ…ハァッ…」

足が重い。

「もうすぐですから。」

「…は、はい。」

重力に逆らうって…凄く大変。

5階まで上った時に、エレベーターの前で言い争う五十嵐と、数人の男子生徒を見た。

…エレベーターが下りてこなかった理由がわかったかも。

それで、5階でエレベーターが動き始めたことに気づいて『エレベーター使いますか？』って山武さんに声をかけられた。

そのときのあたしはまだ余裕があって『大丈夫です』なんて言って…この様です。

階段には誰も居なくて、あたしと山武さんの声と足音だけ妙に響いていた

「松ヶ丘学生寮はいかがです？」

「すごい…です。全部…大理石とか……ありえない…ですもん」

山武さんはあたしが息を切らせながらトロトロと喋るのを待ってくれている

「全て大理石と分かるなんて弓月様は素晴らしいですね。」

「名前までは…わかんないですよ…」

「十字廊下のベージュの大理石はボテチーノクラシコで明るく、2号館ロビーはティノスグリーンでシックに仕上げてあるんですよ。」

「へぇ〜…」

丁寧な説明に素直に納得していると…

［３８］（後書き）

こんにちは、いつも読んでくださってありがとうございます！
アクセスは日に３０人ほど…。
人気の小説を書く方には『少なっ？』って感じだと思いますが
わたしが書く駄文には十分すぎます（泣
皆さんありがとうございます。

智…ていうか慶ちゃんと五十嵐暦先輩の部屋がある９階。
慶は９階に上る以前にグタグタになってます↑
『９階くらい普通に上れる』っていう方もいらっしゃると思いますが…

私自身、夏休みに予備校に通っている時…２こあるエレベーターがなかなか来なかったり、人がギューギューだったりするとガッツで１階から８階まで上ったのですが……
『やばい。凄い疲れた。』を連発してしまうほど辛かったので…慶ちゃんにも『ヤバイ、疲れた』を体験してもらおうと…こういう設定にしました。

１階から９階くらい普通に上れるようになりたいですね（笑

［39］

「こちらが2号館9階でございます。」

その言葉にいままで足元を見ていた顔をあげると

ロビーと同じグリーンの床に、壁にはブラケット照明と木製の重々しい扉が6つ。

そしてまた水！？

なんかヨーロッパの広場にありそうな感じの半裸状態の女の石像が持った水瓶からチョロチョロと…水が…

…これは…外にあるべきものではないのか？

「…こ、ここが家になる…んですね」

「…？　えぇ、そうですね。弓月様の家になります。」

それからその場でしばらく息を整える。

あたしが息を整えている間、山武さんが丁寧に寮の説明をしてくれた。

1階がロビー。医務、兼、寮監室。

各寮の寮監は医師免許を持っているらしい…そして夜は寮監として、昼間は学校の医務室で働く。

「山武さんは何処に住んでるんですか？」

「私は2号館用務員ですが、学校の近くのマンションに住んでます。」

「…平日に学校の外に出れるんですか？」

「ええ、職員用通用口がありますから職員は出入り自由です。まあこの学校は広いですからね…物好きで独身の先生なんかは学校に住みついていますよ」

2階が買い物をする階。ここで生活に必要なものは大抵揃う。

食品販売、日用品販売、は年中無休。

「品揃えはそこらのホームセンターと変わらないですよ。ノコギリとかも売ってますし、自転車のタイヤとか…発電機とかも売ってますね。」

「は、発電機…？」

「必要になる方がいらっしゃるかと思って用意しております」

「……そんな人いないと思いますよ。」

同じく2階の美容室…床屋は週に3回開店で、予約制。

そして2階にどかーんと空いた広いスペースに週末は衣料品販売のお店だったり…何かしらくるらしい。

「衣料品販売ってたとえばどんなお店が来るんですか？」

「先週は……なんと言うんでしたっけ…あの…えーと……海に行くような人が着ている」

「…サーフ系ですか？」

「ええ！それです、それ！寮生から呼んで欲しいと要請があったのでそちらのお店を呼びました。」

「寮生の要請でお店を決めるんですか？！」

「はい。寮生からの要請が１つでもあればそのブランドを呼びます。」

「……なんて贅沢な。」

３階はジムにプールに食堂

「朝食、夕食の２食がとれます。昼食は学校の食堂でとってください。」

「…誰かが作るんですか？」

「…？　弓月様は可笑しなことをおっしゃいますね。シェフが作るに決まってるじゃないですか。」

（…朝はヤマザ〇パンのランチパックが食べたいって言ったら負け組の世界なんだな。）

４階からがようやく学生の居住空間になる。

各階に５部屋、４階から９階までの６階分で全２５部屋。

一部屋４人で丁度松ヶ丘のＡ組１２０人が収まる。

「あの…1つの階に5部屋でどうしてドアが6つあるんですか？」
慶はまじまじとドアを見つめて言う。
上がっていた息はすっかり戻っていた
山武は一つ、雰囲気の違うドアを手で示す
「あちらの扉をあけていただけますか」
「あ、はい。」
言われるがまま、そのドアに近寄って扉を開ける
「うわぁぁぁーっ」
感銘を受ける
大きな窓には大都市のパノラマが広がっていて…
もっと近寄って眺めようと奥に進むと
———ゴンッ！！

「痛っ！」

ピカピカに磨きあげられたガラスの壁？

手前に…お風呂？

「や、山武さん…こ、ここって…」

「水廻りになります。」

そう言われて周りを見ると

ガラスの向こうには大きな浴槽、近くには洗面台、洗面台の向かいにある５つのドアはきっとトイレだ。

「トイレとかお風呂とか…部屋にあるんじゃないんですか？」

「部屋に付けたかったんですが裕福な家庭に育った御子息は……」

山武さんはそこまでいうと困ったように笑った。

なんで続きを言ってくれないんだろう？

そう思って…気が付いた。

たとえそれが偽りだとしても…自分は今、御子息に含まれているんだということを。

…掃除ができない。そういいたいんですね。

「でも…これ外から丸見えじゃないですか？」

「ちゃんと外から隠れるように工夫はされているんですが、大体は浴槽に溜まったお湯が曇らせるので」

「な、なるほど……朝とかやっぱり混むんですかね？」

「この階の寮生２０人が一斉に集まるので…何か色々と大変だと聞きました。それに朝にシャワーを浴びる寮生もいるようで…」

…少し早起きしよう、そうしよう。

［４０］

水回りの部屋から再び９階のエレベーターホールに戻ると、山武さんは革靴で大理石をカツカツと鳴らしながら、ひとつのドアの前で立ち止り、

「こちらになります」

そう言った。

そして黒いスーツがよく似合うしゃんとした体から伸びた手が、ひとつの扉を示した

木製の重々しい扉には、４桁の数字が金色に光る

“２９４０”

そしてその下に数字より大分小さいサイズのアルファベットが並べてあった

“Ａ．ＴＳＵＫＵＭＯ”

“Ｍ．ＨＡＮＡＭＩＧＡＷＡ”

“Ｎ．ＭＩＨＡＭＡ”
“Ｔ．ＹＵＤＵＫＩ”
ツクモさんとハナミガワさんとミハマさん…これから一緒に生活するルームメイト。

山武さんは扉を見ながら突然呟いた
「…弓月様の御実家は何をなさっていらっしゃるのですか？」
「え？…ど、どうしてそんなこと聞くんですか？」
「九十九様、花見川様、美浜様。同室の方々はこの国の有数の大企業の御曹司ですので」
「こ、この国有数？！」
「えぇ。日本の経済に影響を及ぼす企業です」
と当たり前のように言ってから、自慢げに胸を張った
「しかし慶智は日本だけでなく、世界有数の大企業です。」
なんだかこのまま慶智自慢が始まりそうだったから

「案内ありがとうございました。それでは！」

一方的に終了させた。

そしてあたしは逃げるようにして２９４０室の扉を開けて中に入る

勢いよく閉めた扉に寄り掛かり、天井を仰いで目を閉じた

間違いない…あの人…

「…ケイチスト、だ。」

ケイチスト。

慶智グループをこよなく愛し、慶智グループが世界一だと信じてやまない人達を指す言葉…らしい。

あー…この部屋良い匂いがする

閉じた瞼をほんの少し開けると、視界は真っ白に染まっていた

「……白い部屋？」

綺麗な白。くすみもなにもない。

これは、そう

「…雪だね。」

ここはきっと真っ白な雪が冬景色をイメージした部屋なんだ。

「……雪さん、こんにちは」

思わずそうつぶやくと、雪のように白い壁が動いた

『雪じゃないよ、紅葉だよ。』

えっ！壁が喋ったぁ？！

いやいや…ありえないから。

うん、そう、きっとあたし疲れてるんだ。

早く同室の人たちに挨拶して寝よう…

そう思って中途半端に開けていた目を全て開く

「え？」

「だから紅葉だよ。」

壁は…壁じゃなかった。

目を開いた先に居たのは紛れもなく人間で、あたしを見下ろすように目の前に立っていた。

その人は

「僕は雪じゃないよ。」

そう言うけど、その肌は白く透き通っているし、身に纏った白いシャツもあいまって、本当に雪みたいだった。

「雪じゃない。紅葉。」

「も…みじ？」

「花見川　紅葉。」

「はなみがわ…もみじ？」

「そう。僕の名前。」

そうあっさり返事をすると、花見川　紅葉はあたしの腕をガシッと掴むと部屋の奥へと引きずっていく

引っ張られて、横向きに進む視界には

茶というより黒に近いくらいの重みのある腰壁。腰壁より上は深い緑、萌黄色の壁紙で、

床一面に敷き詰められているのは、とても濃い…黒を混ぜたのではないかと思うくらい暗い赤色の絨毯。

ここまでくると…センスうんぬんの話じゃないような気がする…

一段と開けた場所に到着すると

花見川紅葉は容赦なくソファーの上にあたしを投げた。

あたしの体を受け止めたソファーは『ボフッ！！』っと見事な音とホコリを立てる。

女にこんな扱いする？！！ってキレそうになったけど…あたしは今は“僕”なんだ…我慢我慢。

投げつけられたソファーの周りに人が寄ってきた

「ようやくご到着ですね。」

「ほんとに。どんだけトロいんだっつの。」

［41］

男だと勘違い…いや、男だって入学してきてるんだから…何をいまさらって感じだよ自分。

なんて心の中でひとりツッコミを入れながら、予想以上に強く投げられてソファーに打ち付けた顔面をさすりながら体を起こす。

「これまた随分とひ弱そうなのと同室になったもんだな。」

「周（あまね）、そういうこと言わないの。」

「…相変わらず紅葉は優しいねぇー。なんだっけ？ボーイズラブってやつ？」

「は？那岐うるさいよ。僕にそういう趣味は無いって何度言ってるよね？」

「口だけなら何とでも言える。」

「…おいおい、喧嘩すんなよお前ら。」

「周は黙ってよ」
「周は黙　れ　」
「あー…はー…すんません。」

三つの声があたしのを囲んで何かとてもガキくさい会話をしている。
アホらしすぎて顔を上げると、三人が同時にあたしを見下ろした。
その顔は…とてもマヌケで…慶は正直、“ダサい”と思いました。

花見川紅葉の顔は分かる。
一段と色が白くて、とても優しい口調に反して、かなり乱雑な扱いをする…ギャップを秘めた青少年。
「改めましてこんにちは。花見川（はなみがわ）　紅葉（もみじ）です。紅葉って呼んでね。」
少し高めの声に、色素の薄い髪、瞳の色はブルー…たぶんハーフだな。
そして、そのお隣にいるのはとても紅葉の白さとは対照的な、色の

黒い青年。

「どーも。俺は、九十九（つくも）　周（あまね）。」

なんつーか…濃い、顔が濃すぎる！！

最後は、特にコレといった特徴のない…でも少しだけ整った顔をした人。

「お前が弓月　智？　近寄るなよ、貧乏人！」

…ハイ。第一印象サイアクーーー。

性格悪い、顔微妙、背低め、こいつ最悪三拍子揃ってやがるぜーっ！！

って感じで、同室の彼らのファーストインプレッションはあまりよろしくありませんでした（特に最後の奴）。

「ねえ、那岐も自己紹介しなよ。」

「そうだ、お前もしろよ。」

そう2人に責められて、ようやく最後の一人が口を開いた

「…美浜(みはま)だ。」

「“美浜だ。”じゃないでしょ、あなたにはお名前がないんですかあ？」

「美浜……那岐(なぎ)。」

「はい、那岐くんよくできましたねぇ。」

見た目と口調に反したかなりのサドっ子ぶりを発揮している紅葉は、そういうとわざとらしく那岐の頭を撫でる。

「さ…触んなッ！！このオカマッ！！」

那岐はそう声を荒げてソファーから慌しく離れていった。

「紅葉、那岐のことといじめすぎ。」

そう笑いながら、周はあたしが座っているソファーから重々しい木製のローテーブルを挟んだ向こうのソファーに腰をかける。

「…先に絡んできた那岐が悪いよ。」

そして紅葉はあたしの隣に腰を掛けた。紅葉が座った反動でソファ

ーが軋む。

「那岐は僕に勝てるわけないんだから、もう少し自重すれば良いと思うよ。」

ココにはいまあたしと紅葉と周しかいないのに…誰に言ってるのか、紅葉は結構な大声を出す。

すると、何故か枕が飛んできた。

「ま、まくら？」

床に落ちた枕を拾い上げると、紅葉はクスっと笑う

「あーあー、相変わらずお子ちゃまだ。」

何故、今に枕が飛んできたか理解できていないあたしを見て周が口を開く。

「ワンフロアなんだよ。」

「…ワン…フロア？」

「そう。壁がない。全部繋がってる。」

「えっ？」

思わずソファーから立ち上がる

確かに…部屋を仕切る壁がない。ドアがない。はるか遠くに…エレベーターホールと２９４０号室を隔てる壁と扉があるだけだった。

この空間はとても広い長方形で、中心はソファーやローテーブル、大画面のテレビ、などなど共同スペースになっているらしい。

その長方形の長い一辺の真ん中から通路が延びて、エレベーターホールに繋がる扉がある。

個別…って言えるほどじゃないけど…４人には四隅をそれぞれのスペースとして使うらしい。

それぞれの四隅に天蓋付きのベッドに学習机、洋服ダンス、本棚、、、

まあ…長方形の隅っこといえど、かなりの広さがある。

ひとことといえるのは

「…プライベートの保障がされてない。」

あたしが思わずもらしたその一言に、目の前に座っていた周が頷いた。

「俺も最初そう思った。でも仕方ねーよ。」

「仕方ない？」

「そ。俺らお坊ちゃま育ちで協調性とかねーし、こういう環境におかれなきゃ仲間を知らずに死ぬことになるからな。」

［42］

仲間知らないで死ぬ

って…そこまで大げさにしなくても…

「あーところで…思ったんですけど、九十九くんと花見川くんと美浜くんは昔から仲良いの？」

「いや別に仲良くないけど。何で？」

「だって…いまも冗談言って笑いあってるし…知り合いなのかなーって…」

「…“知り合い”っつー表現なら間違えじゃねえけど、“仲が良い”って程じゃねぇ。」

そういうと、いきなり着ていたワイシャツのボタンをとり始める

「え？！ちょっ！！何脱ぎ始めてるの？！」

「何って…風呂。」

そしてあたしの顔を見て眉をしかめる

「お前なんで赤くなってんの？」

「だ、だって九十九くんが急に脱ぐからっ」

「…キモい…お前男の裸見て顔赤くすんな！しかも、九十九“くん”って何？まじキモいんだけど！」

そ、そんなこと言ったってあたしは男じゃないし！

今まで凄く純真な生活を送ってきた…故に男に免疫がないんじゃい！！

とは、言えず…

「…す、すみません。」

と平謝りしてみたが、それも逆効果だったらしい

「何肯定しちゃってんの？！そこは謝らずに否定するところだろ？！」

「で、でもっ…」

「でもも糞もねえ！キモいんだよっ！！」

そう怒鳴り散らして、九十九は着ていたワイシャツをあたしに投げて部屋を出て行った

天国のおじいちゃん、慶は…入学早々、寮のルームメイトに嫌われてしまいました。

とほほ。

そんな効果音がマンガみたいに自分から出そうになるほど肩をガックリ落としていると、

美浜のところに枕を返しに行っていた花見川が戻ってきて再びあたしの隣に腰をかける。

「気にしないでいいよ。周は友達っていうのが出来たことがないから、接し方がわからないだけなんだ。」

「…九十九のこと詳しいの？」

「僕たちは幼い頃からパーティーだとか、そういうところによく連れて行かれてたから…。」

そういわれてようやく彼らの関係を理解した。

“仲が良い”わけじゃなくて…ただ知っている“知り合い”の関係？

「周は、見た目もあんなだし、口調も性格もあんなだから、パーティーとかでもよく独りだったんだ。」

「…それで花見川く…花見川が話しかけたの？」

「挨拶を交わすくらいだよ。同い年の子供はよく比べられるから、そういうお子様自慢に自分があげられるのが嫌で近寄らなかった。」

いわば僕も独りだったんだ。そういって花見川は笑った。

「なんか…可哀想だね。」

小さい頃はお金持ちに凄い憧れてた。

欲しいものは全て手に入って、何百部屋もある大豪邸に住んで…。

でも、それなりの苦労もあるんだなって…そう思うと可哀想になる。

「…そう、周は可哀想な奴なんだ。だから友達になってあげてね？」

「え…あ…はい…頑張ります。」

返事を聞いて納得したのか、花見川は満足そうに頷いて話しを変えた

「そういえば、“弓月”って聞いたことないけど…」

「え〝っ？！」

「家、何してるの？」

「ち、父親は…慶智大の准教授…」

「母親は？」

「母親はせ…」

“母親は専業主婦”と言いそうになって踏ん張る

あたしは今、慶じゃない。智なんだ。

…智ママは確か

「…ボー君の秘書」

をやっているハズ。そんな話を聞いたことがある…。

「じゃあ一家揃って慶智グループの関係者なんだね。」

「…そうなりますね。」

「ま、慶智は世界に５０万人の社員を抱えてるっていうからそれくらい居ても当たり前だね。」

花見川はそうぼそっと呟いて、あたしの膝の上から九十九のシャツを取り上げた。

そしてそれをそのまま鼻に近づける

「…クサい。」

たった一言で、花見川の白い手に握られていたワイシャツは綺麗な弧を描いてゴミ箱へと吸い込まれていった

「じゃあ、僕もお風呂に入ってくるから、またあとでね。」

「あ、はい。またあとで。」

［４３］

２９４０号室の人間は慶以外全て風呂へと向かう、

もし、あたしが男だったら一緒行って裸の付き合い（？）とやらをやってたんだろうね…でも…ほら、まな板みたいでも一応女の子だから！

って“まな板”とか自分で言って泣けてきた…。

「……荷解きしよ。」

そういって慶は、窓際にある自分のスペースへといって、ダンボールのふたを開けた

―――その頃、お隣の２９５０号室…

「またお前らと同じ部屋とか……最悪。」

「桐生、“黒”がでてるよー」

備え付けの棚から真っ白のバスタオルを取りながら一段と背の低い少年が笑った。

桐生はその少年の手からバスタオルを奪い取る

「人聞きが悪いな、佐倉。…俺はいつだって“白”だよ？」

佐倉と呼ばれた少年はあきれたように笑う

「学校じゃ誠実ぶってモテモテだけど、お前って本当に自己中心的。黒過ぎる、他人をすぐ見捨てるタイプだよね。」

「いや、そうでもないらしぞ。」

突然二人の会話に割り込んできた人間は、ソファーの背もたれに腰を掛けて洋服の裾でメガネのレンズを拭いている。磨き終えたメガネをかけ直すと再び口を開いた

「コイツ、今日廊下でぶつかった新入生の世話してたし。」

「えーっ桐生が？！　他人とぶつかって怪我させたとしても絶対に適当にあしらって終わらせるであろう桐生が？！」

「あぁ、己の制服脱いで優しく肩にかけてあげたうえ、優しく肩を掴んで立ち上がらせてあげてもいた。　なぁ？桐生、そうだろう？」

「…フン！」

桐生は荒い鼻息を出して、バスタオルと着替え片手に部屋を出て行った。

「照れてる照れてるーっ」

「容易いな。　佐倉、俺らも風呂行くか」

「おう！」

佐倉は元気よく返事をして、部屋を飛び出していく

部屋に残された五十嵐は、部屋の片隅にある机に黙々と向かっている背中に問いかけた

「永田、お前は？」

「……後で入る。」

「…そ。じゃあお先。」

そういって着替えを抱えて、棚からバスタオル取り、外に繋がる扉に手をかけると同時に口を開く

「なぁ、永田、」

「何？」

「あんま熱くなりすぎるなよ。」

「…別に…熱くなんてなってない。」

「あっそ。ま、程ほどにしとけよ。」

「…うるさい。」

その永田の一言に、五十嵐はため息をついて部屋を後にする。

「ほんとかわいくないヤツ。」

9階のエレベーターホールに五十嵐のぼやきが小さく響いた。

――大都会の夜景を一望できるはずの大きな窓は湯煙でくもり、広い浴室にこもった湯煙があたりを白く霞がからせて、オレンジ色の照明がぽわぽわと辺りを照らす

「おー新入生いい体してんね」

「あ、ありがとうございまス。先輩こそいい体してますよ。」

「アハハ、ムリしなくていいから。」

裸の付き合いとやらは、相手の体の品評からはじまるらしい

1号館の最上階である9階は日本経済に影響を与えるほどの大企業の御子息たちの集まりなわけだけが…考えることは、年頃の一般庶民の少年らとなんら変わりない。

が、彼らは慶智大学附属高の敷地から出ることを許されていないの

で、世界は狭く、同じ附属高で同じ敷地内で暮らす櫻乃葉高校か近木高校の女子生徒…もしくは、彼ら目当てで学校の敷地を囲うフェンスにへばり付く女たちだけが妄想のターゲットだ。

「中学時代、彼女いた？」

「いましたよー。ボンッ！キュンッ！ボンッ！しかも顔良し！」

「えーまじでーすげぇなっ！ってお前それ嘘だろ！」

「あ、やっぱバレます？」

「あたりまえーだろー」

そんな他愛ない会話でケラケラと笑って、新入生と在校生たちの仲が深まっていくと、慶智グループを束ねる豪腕神宮寺紡太朗…通称ボー君の孫の話になった。

「ボー君が、“可愛い孫娘のムコ探す”って言ってたけど…孫娘って誰だよって思わねえ？」

「分かる分かる。可愛いって言ったってさー、絶対身内の偏見はいってるよな。」

「まぁボー君が孫娘を慶智に入学させたとして…共学には入れなさそうだから…櫻乃葉？」

「だろうな。てか、櫻乃葉以外ねえだろ。」

「とりあえず、ボー君が贔屓目ではなく客観的に孫娘は可愛いと言っていたとする。そして慶智大学附属櫻乃葉高等学校に入学させているとして……誰か櫻乃葉に可愛い子ちゃんが居るって話聞いてないの？」

するとこの空気に慣れた花見川紅葉が口を開いた

「入学式の前、クラスの横井はやとっていうやつが怪我して、櫻乃葉の子がハンカチ渡してたんですけど、かなり可愛かったですよ。」

「「「「「どんな感じ？！名前は？！」」」」」

先輩たちのあまりの食いつきぶりに驚きつつ、紅葉は続きを話す

「いかにも清楚って感じの見た目で、白いハンカチがよく似合ってました。名前は確か……“一ノ宮　慶”ちゃん。」

「んだよ“神宮寺”じゃねーのかよ。でも…可愛いなら見る価値アリだな！」

苗字が違えど、孫と祖父の関係は成り立つのだという突っ込みは置いておいて、“可愛いなら見る価値アリ”という言葉に皆が頷いた。

結局、浴室であがった櫻乃葉の可愛い新入生の名前は

“一ノ宮　慶”

“市原　萌果”
“八積　琴子”
“鵜原　蓮”
“日向　向日葵”
の5人だった。
祖父と孫の関係で苗字が違っていることがあっても不思議ではないし、彼らはこの中からボー君の孫を探すことになった。

「どうするー本当にボー君の孫見つけちゃったら。…婚約する勇気ある？」
「俺は…そんな勇気無い」
「俺もない」
「俺も…。」
“俺も”“俺も”なんて、弱い返事が浴室に木霊する。
「ボー君の身内になるのも大変だし、第一…慶智を支えるほどの力がない。」
「…だよな。」

さっきまで明るかった浴室に重い空気が漂う

「…のぼせる前に上がろうぜ。」

「おう。」

その一言で、皆が続々と浴槽から上がり、真っ白のバスタオルで体を拭いた――――

［４４］

ダンボールの箱の中からせっせと荷物を取り出してはや３０分。
もともと荷物は多くはなかったし、家から持ってきたもののほとんどが綺麗に自分に与えられたスペースに並んでた。

最後に茶色い箱に残ったのは、『せめてこれくらいはっ』そう思って、家から持ってきた女の子らしい丸いフォルムの淡い白いフォトスタンド…。

ダンボールの中からそっと取り出してやると、部屋のオレンジの照明を浴びて、ほんのりと赤みを帯びる

「あったかそうな感じだね。」

「っ？！」

突然後ろから声がして驚いて振り返ると、花見川紅葉が立っていた。

風呂から上がったばかりらしく、彼の濡れた髪の先からぽたぽたと水滴が垂れる

「…“あったかそう”？」

「うん。そのフォトスタンドの雰囲気も、写真も……、あったかそうだよ。」

そう言われて改めて写真に目を落とす。

中に入っているのは、家族の写真。

小高い丘の上にぽつんと建てられた小さなお墓の前で、お父さんとお母さんとおばあちゃんとあたしが

こっちを見て笑ってる。

「そのお墓は弓月のお祖父さんの？」

そう、おじいちゃんのお墓。でも、弓月のじゃなくて一ノ宮のね。

“僕”じゃなくて、本当の“あたし”の…ここに持ってきたたった一つの私物。

「母方のおじいちゃんのお墓だよ。」

「お祖父さんも幸せだね、家族で墓参りに来てくれるなんて。」

そんな花見川の言葉を否定するように横に首を振って、あたしはフォトスタンドをぎゅっと握りしめる

「幸せじゃないよ。」

「…え？」

「僕の父親は幼いころに両親を亡くして親戚に育ってられて、親戚の家も決して裕福じゃなくて。でも、母親は田舎で有名な資産家の娘で…。」

ここまで聞いて、大体は理解できたんだろう。花見川は真剣な顔であたしを見る

「このお墓に眠ってる人は、結婚に大反対だったわけで…それで…生まれてきた僕のことも嫌いだって言ってね…、」

手に持っていたフォトスタンドを机の隅に置くと、カツンと哀れなくらい軽い音がした

「結局、こうやって死んでお墓に入るまで…一度も会ってくれなかった。　だからこれは僕とおじいちゃんの初対面写真。」

一通り話を聞いてから、花見川が頭をかく

「…なんかごめん。幸せそうだなんて勝手に言って。」

「いやいや、気にしないで。それより僕こそ暗い話しちゃってごめんね。」

あたしがそう言った途端、ドアが開く音がして

美浜と九十九が、花見川から一足遅れてお風呂から帰ってきた

「あれー？お前らなんでそんな部屋の隅っこで固まってんの？」

乱雑に短い髪をタオルで拭く九十九がふと呟く。

その一言に過剰反応したのはもちろん美浜だ

「花見川紅葉っ！キサマやっぱりボーイズラブってやつだな！」

「…違うって言ってるでしょ。なに？また僕に苛められたいわけ？」

「い、いじめるって！俺がいつお前に苛められたんだよっ！」

「何時？“い・つ・も”でしょ。」

「お、お、お、俺はっお前にいじめられたことなんてないっ！！」

「それって負け犬の遠吠えっていうやつだよね。」

…この部屋のメンバーで一年もつのか…いや、一週間もつのかさえ心配です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7989h/

逆転生活！

2010年10月26日13時47分発行